

特 218
360



始



特218
360



先生様
と
生徒



目 次

花嫁が胡座	一
空前の失策	一〇
筆無精の五男信一	二〇
逃げろく	二六
方があるぞ	三六
此の焼ケ嶽め	五九
尊き師の恩	四七

調利 先生様と生徒

目 次



目 次

尻から三番の先生……………五
 二杯の飯よ……………五
 師、師たらずとも……………六
 狂はなければ……………六
 妙な缺席……………七
 雨か嵐か……………七
 變なお菜……………七
 英語の威力……………八
 變な御伽噺……………八
 木乃伊ごっこ……………九

目 次

赤んべのべ……………一〇
 唇を紫色……………一一
 大數學家でも……………一〇
 消化の研究……………一五
 松露取れッ……………一九
 鐵拳うなる……………一五
 世が世ならば……………一九
 諸君は馬鹿だ……………一四
 之は堪らぬ……………一六
 蜂よ蜂よ……………一五

目 次

希望の光……………一五七

俵藤太と己れの母……………一六三

先生は拙手……………一六七

火事の膨脹……………一七四

トングダ心掛……………一八〇

不吉な金曜日……………一八五

藤網は五年生……………一九二

旨く遣つたね……………一九七

屹度心残り……………二〇五

いゝ面の皮……………二〇九

目 次

矢ッ張り先生……………二二四

箱根の山……………二二七

零點附けました……………二三九

濫い返事……………二四五

出るぞ出るぞ……………二五五

化者集まれッ……………二六五

支那人は漢文……………二七一

先生の白状……………二七四

オ、苦しい……………二七六

朝野の貴賓……………二八二

今度は大丈夫……………二九一

目次終

諷刺先生様と生徒

◎花嫁が胡座

嘗て學校生活の時、運動會の餘興の際に僕は「狐のお嫁さん」に扮装した、之がもう非常の評判を生んだもので、當時「狐の嫁」と云へば噂の七十五日以上に話題になつたものである。

(1)

徒生と標生先

何しろ規模は頗る大仕掛けで、狐の嫁と婿と籠擔ぎと、嫁の母と、それに供の人数がザツと卅人。是れ等の者は各自に家から上下を取出し、それに扇子を持つて狐の面を被つて、普通の人間の嫁取りそ

の儘の業々しさ、違つてるのは狐の面と籠だけだ。

僕は其の時嫁を務めた、衣裳は芝居小屋から故意々々高價い金を出して借りたものだから、花嫁振りに掛けては決して仕度が無いなご、後指をさゝれぬ方だつた。

僕としたら女の着物なんか着るのが生れて始めてだから、變テコを極め摺つた揉んだと大騒ぎ。人形に衣裳を着けられる様に引張り尻になつて漸つこの事で一人前、それに鬢を被つて高嶋田の初々しさ、自分ながら惚れつき度い位の申分のない出来。

愈々その裡に時間が来た。出場用意と云ふので、僕は花嫁だから早速籠に行儀正しく坐はる。それを籤に負けたお供の狐四人がヨツ

トコサと擔ぎ、二歩三步前へ出て、ヒイ／＼云つたかと思ふと、擔を籠を投げ出し、

「オイ西川君、下りて呉れろ」

「厭でござんす、妾しや花嫁ぢやわいなア」

「迎も重くて四人では擔がれやしない、後生だ、下りてくれろ」

成程供の者共がウンザリ斯う云ふのも無理はない、己れは體重十八貫、それに籠の拾貫近くの重さが加はるから並大抵ぢやない。それではと、己れはお母様の手に引かれて、静やかに歩くと云ふことに定めた。お母様と云ふのは六尺二寸と云ふ待乳山そつち退けの大男、僕は又五尺六寸と云ふ男に珍らしい逞ましさを、それだから猶面

白いのだと皆癡は手を打つて喝采する。
 お母様と僕は俄かに内股歩きの練習を始めた、そして一步一尺の割合で歩くのに制限され、其の上羞耻の様を有ったけ作れなご注文の喧ましいッたら、花嫁の心の中へ入つて見る、オドクして了つて何うすりやい、か解らなくなつて来る。

時間が到々きた、今迄狐の面を取外して、ホツとしてゐた連中は僕を真似て慌て、ちよん鬘の鬘を被り、己れは又花耻かしき狐面と高嶋田で花嫁振りを整へ、籠を後から従へて、淑やかに乗り出す。幾萬の群集はわーッと叫んで喝采を續けた、足を内股にして、他人に顔を見られるが、羞かしいと云ふ風情を示し、時々袂で「あら

厭よ」と許り顔を隠した。それがしほらしいと大受け。だから其の方ばかりに夢中になつてると、ツイ足の方の事を忘れて仕舞うものだから、見物の中から、

「ひやア亂暴な歩き方をする嫁だなア——」

と冷評かされて始めて吃驚、慌て、内股に歩き出すが、平生馴れない事を俄か仕立の情けなさ、足が裂ける様に痛い。それでも花嫁の慎として我慢して歩いてたが、もう堪えられなくなつたので、

「お母さん、足が痛たうござんす」

するとお母さんの返事も可哀想だ、

「娘、お同様でありんすぞえ」

見ると、ウーム／＼吐息をつきながら引摺る様に歩いて御座る。

「ヒヤア大かえ嫁だなア、婿さんは捻り潰されらア」

「あの足を見い、筋骨凌々としてゐる」

なご、批評連続、己れは扮衣の前を持つて、着物の重なりを見せ附けながら時々真紅の腰巻をチラつかせるもんだから、大抵の若い衆悉皆當てられて了ひ、

「こりや堪らぬ、逃げる／＼」

に思はず噴き出すと、又口の悪い連中、

「お嫁に行くのが嬉しいんだい、イヨ、花嫁、お顔拜見」

と、雪崩を打つて覗き込む。僕は狐の面顔を、ツと見せて、ツと又

袖で隠すと、

「明日から耻かしくならねえぞ」

とは恐ろしく早合點の奴。

廳て行列は一巡の後、場の中央に來たり、豫ねて設けられたる席に花嫁花婿對座、それに母親親戚一同ズラリと並び、三々九度の盃を濟ますと、同勢の面々聲を揃へて「高砂や——」を唱ふ、それが如何にも本物だったので、人々稍意外のさま。

それが終ると、嫁と云はず婿と云はず母親と云はず供の連と云はず、今出た狐一同の二町競争が始まる事になつた。その賞品が原語の獨逸辭書だといふので皆塵躍氣となつて勝を奪はむ勢ひ。斯うな

ると主従の情もあつたもンぢやない。
 一同は面を被つた儘スタートに片足出して身構へた。一……二……
 ズドーン。素破ツと一目散！人々あれよくと許り。
 見る／＼己れは即ち花嫁は第三位を占めた、モ一氣で越せるのだツ
 と焦つと同時に眞の男としての競争の氣持ちになつてきた。まゝよ
 斯うなりやと己れは突然狐の面を放り付けて、眞ッ黒な髯面をのめ
 り出し、裳に手を掛けるが早い、雲助見たいに禪一貫の毛脛赤
 裸々にウヌレと駆け出したので、見物驚くまい事か、
 『わッ、髯ッ面だ、わッ』
 ど、呆氣に取られ、

『矢張り狐だ哩、旨く欺しやがつた！』
 と、吐く者もあれば、
 『ヒヤア花嫁が尻捲くつて駈出しやがらア、行儀の悪い嫁御だなア』
 と、二の句も出ないと云ふ有様、己れは其塵事に頓着なしに、息セ
 キ韋駄天の如く追ひ越し、追ひ越し最後の速力かけて、決勝點目掛
 け、大手を振つて、
 『一等賞！』
 さて休憩所へ入ると、汗がだら／＼流れ出て來るので、素裸にな
 り、
 『オ、苦しかった！』

と、腹胸つき出し、手拭で拭いてると、花嫁は何處だ〜と彼處此方から彌次馬が覗いて見て、

「ヒエー荒馬見たいな體格だなア〜」

と、只管恐れ入つたのがあるかと思へば、中には後の方から延び上がつて覗き、

「やア花嫁が胡座かいてらア!」

◎空前の失策

これは又僕の失敗の一つである。

石田郷六君が學校時代に蓮の如き雪子さんと結婚式を挙げた。何がさて學生時代に嫁を貰ふなどは珍らしい方で、ワイ〜騒ぎた

い盛ときてゐるから、岡焼き半分郷六君を戲弄つて、「唯では済まされぬぞ」と知る者毎に征め立てるもんだから、郷六君も黙つてゐる譯には行かず、到々友人一同へ散布したが、

「拜啓陳者貴下御清榮の段慶賀し奉候、生儀今回結婚致し候に就いては來る六日御高説拜聴旁々披露の宴を催はし度くと存じ候故萬障御繰合せの午後六時迄に上野精養軒まで御來車の榮を煩はし度候」

の運びと相成つた。

己れも其の招待状を受取つた一人だつたから、兄の紋付羽織を自分の所有物かのように着服して出掛けた。下駄まで大枚はづんで表打

の疊付と鹿爪らしう。

主人公郷六君は門口に此の俄か仕立を出迎へて『よくこそ』と殊勝げなり、僕は御馳走に與かる身であつたから『其塵大人振つた聲を出さなくつたつて』と冷評さす、眞面目に『今晚は御叮嚀に』と挨拶状を述べ、『いざ此方へ』と導かるゝが儘に休憩室へ。

此處には早や主客の大部分が集まつてゐた、

『ホー君も戲弄黨の旗頭だつたのか』

と、大賑やか。

代議士の寄合ぢや無いが、定刻に到ると、郷六君ツと立ち上がつて、

『皆様どうぞ此方へ』

と、神様へ供へ物をする様な手附きして、おのれ先導になつて食堂へ案内する。

食堂の裝飾は眼も醒むる許り、何時どうして此麼巧みな色彩を整へたのかと、先づ最初に度膽を抜かれて、タヂ／＼の目に遭ふ。

客とは云へど皆未だ行儀知らぬ書生連許り、ましてや精養軒と來ては『お初にお目に掛ります』の類だから、さツぱり景氣に吞まれて『満堂の諸君』の豪勢振りも何處へやら、へりに鹽をブツかけた様に小さく成つて、ポカンとして互に顔を見合すと云ふ憐れな状態。『さア、どうぞ、何處へでもお掛け下さい』

と、郷六君切りに供物手を振り廻はすけど、之は又日本座敷とは違ひ、西洋式は何處が正座やら副座やらサツバリ了解らず、大學前で一品料理を無遠慮にパクつくのとは違ひ、上杉博士の問題以上の難關で、幾程薦められても『ヘイ〜』と御辭儀する許り。斯くては何時迄経つても果てじと僕は思ふたので、衆に率先して淡白に、『諸君、僕から失敬します』

と許り、ストープを後に持った暖かそうな坐席に羽織打ち拂つて腰掛けると、皆變も始めて之を見做ひ、勝手に位置を占めて内心何うなる事かと稍ハラ〜の體たらく。

着席終るや白服のボーイ二名が直ちにプログラムを配付する、そ

の日の献立を認めたものだ、茲で又度臆を抜かれた、其のプログラムが獨逸語か英語で書いてあつたのなら、得意で鼻高くウム〜と頷づきながら讀めるんだけど、生憎それが佛文で書いてあつたので、珍ブン感ブン解つたものに非ず、一同小言に『佛蘭西語だナ』と口で呟やくが早いか投げ遣ると云ふ始末。それも實際は佛語が何うか確つかり了解らないんだけど、自分の讀めぬ字は佛蘭西語として了ふ随分得手勝手な話。斯う云ふ自分もハテネと小首こくり。

さて本文に移るが、此の室に僕等仲間だけだつたら假令何麼恥かしい不作法を曝だした所で、其處は内輪同士で済んで仕舞うんだけど、人もあらうに其の道博士のボーイ二名が氣を付けツの威勢で一

同を見張つてゐるから迂濶な真似が出来ない、それが書生むき出しの扮装で来れば未だしもだつたが、揃ひも揃ふて紳士風を装ふて来た連中許りだから、服装の手前を考へても百も二百も承知式。

己れは會席の洋食で始めだつたから、なアに誰れか此の内に知つてゐる者も居るだらう、そうすりや其の者の猿真似さへしてゐりや過ちなんでありやしないからと高を括つてゐると、之はしたり!!
ポールの奴一番最初に僕の方へ運んで来る、後で聞いた話だが、ストープの前に坐る客は最も主賓とするんだそう。

僕は其れでは聊か勝手が違つて来るから、

『僕は後で宜しいから』

と、堅く固辭した。之も後での話だが、西洋式では此慶事は失敬な仕打と鑿鑿されるんだと聽いて火の様になつた。

ポールは己れの云ふ事を聽かず是非にと薦めるから仕方なしに其の儘になつた。次に大きな七面鳥の丸焼を持ち運んで来た。そして黙つて己れの服の先きへ突き出した。幾切れお取りなさいとも何とも教へずに。己れはハタと當惑した。仕方が無かつたから、卑しい身分の者で無いぞと許り、ホンの一口分ほど摘んだ、そして徐ろに見て見ぬ振りして隣りの男は何うするだらうかと窺つた。

然るに其の男無定見なる哉だ、彼れはフオークを手にしなから、己れの皿を流見では分量を見計らひ、御自分の皿へ別け取つたのが

寸分この己れの分と違はぬ大きさ、形。
 オヤ／＼之は飛んだ事、全で己れが御師匠さんに成つたものだ、
 あな笑止やと腹の虫を抑へて更に其の隣の様子如何にと見てあれ
 ば、之は又どうだ、今取つた男の取方を、盗み見て其の通り御叮嚀
 に。

七面鳥の大皿は一巡した、眸を放てば己れの仕た通り、取つた通
 り、それにフオークの置き方迄さても恐縮千萬な。

大皿には七面鳥の良肉の大部分は残されてあつた、之も又々後で
 聞いたんだが、一番最初の者の取方が非常に大切なんだそう、所
 謂巧みに見計らつて多からず又少からず其の肉が一般に平等されて

後へ餘り残らぬ様にするのが法に適つてゐるんだそう、何から何ま
 で法則を無視した處置ばかり、然かも僕が其の張本人だから冷汗だ
 卑しい生れてないと思せる爲めに少なく／＼と取つてゐたのが悉
 く方程式をなさ無かつたのだから面目次第も御座らぬ、ポイに二
 度と逢はす顔がない。

さて大きな失策と云ふのは外ではない、漸々と皿の数を重ねた後
 で、更にポイが大皿に眞白なえたいの了解らぬ代物を載せて例
 の如く僕へ眞先にと持つて来る、その時は稍呼吸を覺えたらしく思
 ふたので、スバリと切り放ち、フオークに刺して自分の皿に載せ、
 ウ、フツ、之も西洋料理が有難いと、突然前にあつた醬油をブツ、かけ

て、一口にガブツと頬張ると、之は變なり、先刻からの品と違つて、ころりツと甘い、はて不思議なと小首傾けてると、遙かに居つたボ「イあたふた飛んで来て僕の耳元へ口を寄せ、小聲で、

『其れは御菓子ですよ』

と云はれてヒエーと腰も抜けむ許り、顔から火花の出る様にカ

ツとして面目玉もあつたものに非ず、フーフー吐息しながら、

『まだ〜洋行が出来ぬ哩』

◎筆無精の五男信一

安原信一と云ふ己れの學友で某校の教授をしてゐる男がゐるが今日も亦ステツキを振り翳し、八字鬢鮮かに、頭も綺麗に別けて遣つ



之伸画

て来た。そして滔々として時勢を論じ社會を批判した。と云ふと如何にも堂々たる紳士に聞える。紳士に違ひないが五男信一めがと思ふとウンザリする。

彼れには兄弟が非常に多い、彼れはその内の末ツ子である。つまり五男信一である。末ツ子と一口に云ふと直覺的に五ツか六ツの子供を聯想するが、此の末ツ子は今年卅二歳である。恐ろしく老けた年だが、それでも末ツ子だから仕方がない、偽と思ふたら戸籍を見ろ。己れは之まで議論に負けたり、タチ／＼の目に逢はされると直ぐ『五男信一が何を云ふ』と逆振を喰はして遣る。すると末ツ子はガツカリして口をつぐんで仕舞う。假令彼れがフロツタコート



着て自動車自動車を飛ばすことがあつても己己れはビクともせぬ。何故何故ならば彼彼れは五男坊五男坊であるから。

己己れは何時いつでも思ふ。世世の中に此こんな筆不精筆不精の男男が何うして世世の中に生うまれて来たんだらうかと。不精不精も大概大概一定一定まで定きまつて居かるものだが此この男男などは全く珍めづらしい、帝國博物館帝國博物館の國寶國寶にしてもいい位くらゐだ。

大急用大急用がある、大至急親展大至急親展と朱書朱書して文面文面の中に『此この手紙手紙着次着次第返事第返事を待まつ』と書かいて遣やる。待まてど暮くらせど梨なしの磯いそ。又また出す、相あひも變からず音沙汰音沙汰もない、三度出さだし四度出たびだしする。知しらぬ顔かほの半兵衛はんべゑ。了しまひには此方こつちも業ごゑを煮にやし、『貴様きさまは一體活たかきてるのか死しんでるの

か、無責任むせきにんにも程ほどがある、不禮ふれいにも限かぎりがある。返事へんじ一つさへ寄越よこせば總すべての問題もんだいが解決かいけつするぢやないか、唯ただハガキに向むかつて一寸スラちよつとと書かけばそれでいいのだ、五分間ぶんかんで書かけるんだ、それを何なんだ、今度こんどこそは返事へんじしろ』と巧たくみに繰たぐつて遣やるがウンともスウとも云いはぬ。だから他吉たきちの友人ゆうじんはひざく腹立はらたて、『彼あんな男なこてありやしない失敬しつげいな、五男信一なんしんの癖くせに』と立ち所たごころに五男信一なんしんを引張ひっぱり出だされてゐる。その癖くせ至いたつて温厚篤實おんかうとくじつな男おとこだけぞ。

五男信一なんしん君くん一日破天荒いちにち破天荒のこゝを仕出しでかして萬人ばんにんを驚おどかした、それは静岡しずおかのおちさんからの通知つうちうで始めて了解わかつつたのだ。或ある年静岡しずおかに大水害だいすゐがいがあつた、家いへは流れ人ひとが死しんだと云いふ程ほどの大洪水だいこうすゐ。爲ためめに静

岡市の殆んど半は多少に係はらずその災難に遭はないのは無かつた。静岡のおぢさんは五男信一に取つては無二の先輩であり指導者であつた。だから信一事末ツ子は新聞で惨状を見るや一刻も早く見舞状を出さなくちや他の家とは違うからと思うたが、其處は例の筆不精ときてゐる。今日書かうか明日にしようかと思ふてゐる間に半月も過ぎた、だから静岡市も半月の内に悉皆秩序改まり、生物皆喜色ありで水害のことなんか殆んど忘れ切つてゐた。所へ飛電、文も御叮嚀にも、

「水害アリシ由新聞ニテ見タリ謹ンテ御見舞ヒ申ス被害如何返事待ツ信一」

とあつた。生憎其の電報を受取つた時にはおぢさんは町風呂へ行つてゐた留守中だつた、だから第一に顔色を變へたのは奥様である、電報と云へば人が死んだか危篤の時か、それとも餘ッ程の重大事件で無くちや受取らない物だと思ふてゐたもんだから、電報と聞くと共にギョツとして胸騒ぎして、顔色まで變へて、慌て、娘を呼び、

「コレ静や、は、は、早く、お父さんを、よ、呼んでお出で電報が来たからと云つて」

「は、はい」

と娘まで電報におびえて胸が騒ぎ、帯も確つかり括らす湯屋を目

掛けて、一目散。

「おとうさん、おとうさんてば電報が参りましたから早く」
 今度はお父様の慌てさ加減でない、娘の氣魂ましい威勢に最初先
 づドキンとした所へ、電報との知らせだからさア驚いた。湯桶から
 飛び出して他人の足を二足三文に踏むやら桶を蹴飛ばすやらで脱衣
 場へ來るが早いか、武装競争の様に大慌てに着物を着（勿論身體を
 拭く所の騒ぎぢやなく）娘ッ續けッ許り石鹼箱掴んで韋駄天の如
 く駆け戻り、汗みどろ、

「で、で、でんぼは、ど、ど、どこだッ」

「其處にあります」

「は、早く、……コレ眼鏡を呉れんか……え、と、ナニ、スイ
 ガイノヨシ……、確つかと意味が了解らぬ、お前読んで見い、餘
 んまり走つたら息切れがしてイヒツ」
 奥様は手にして讀まうとすると、おちさんも娘も矢張り何事が起
 きたんだらうと一刻も早く知りたさに、覗いて氣を努めて沈着せ讀
 み下して見ると上記の始末。大洪水が濟んでから半月も経つてから
 水害見舞の電報もないものだ、北極の果てからならばまだしものこ
 と、一同の不服面一方ならず、有難いやら可笑しいやら馬鹿らしい
 やら澤山の電報料が氣の毒やら、五男信一が遠慮柄杓なく發揮され
 てゐるので悉皆當てられて了ひ、

「信一坊には困るのう——」
驚く勿れ其の信一坊は先日二人目の赤ン坊を産んだ、人呼んで坊が坊を生んだと云つてゐる。

◎逃げる逃げる

己れと一緒に卒業した男に内田と云ふのがゐる、彼れは卒業すると直ぐ講師に拔擢された。其處で下級生は何うしても先生の様な氣がせず内田君々と君捨てにした。それが先生風ふかしたい内田君の氣に障つて仕方がない。了ひの果てが大悶着。

それに凝りて内田君は暫らくチツと辛抱してゐて只管に此奴等の卒業を待ち構へ、どうやら追ひ出して仕舞ひ「あゝ之で漸つと先生

顔ができる』とホツと一息。

月日の経つのは早い、臆で次年の學生も卒業して社會へ出る事になつた。己れが育てた學生だ』と内田君鼻息荒い。やれ就職口を世話してやるなど、悉皆教授氣取り。

此方は卒業生其塵事は知らず『若手のバリ／＼先生に嶄新な學説をきいた』と大喜び。我等學校を去るに臨み、何か贈呈したいものと色々と物品に苦勞し、爲めに委員を設けて大騒ぎ、考案茲に成り立つて、

『贈内田先生 大正五年卒業生一同』

と立派な醒むる許りの煙草入れの盆に金文字鮮かに書き認めて贈

つた。所が内田君何しろ生れて學生から此麼風にして物を貰つたのが始めてときてゐるので、喜んだの喜ばないので、塙檢校が眼が開いた様に喜んだ。之さへあれば假令後日幾程落魄しても『己れは之でも最高學府の講師だつたぞ』と見せ付けるに持つて來いものだ。此麼確かな證據はないと贈呈品を持つて來た學生にビールを奢るやら本をくれるやら、そして故意々々門前まで送つて出るやら、其の學生掻つたくなつて『序でに内まで送つてくれ、ばいゝに！』

しツ聲が高い。

話變つて内田君『私は此麼豪いモンですよ』と見せ付ける爲めに早速故郷の父母へ此の品を送つて内々自慢する、それとは知らず受

取つた老いの父や母『鳶が鷹を生んだ』と近所の者が囁き合ふのを御自分達が鳶に譬へられてるとは知らず『へッへッ御蔭さまで』と涙擦つて喜び咽んだと云ふ。

矢張り之れも己れの同窓だが此の先生名古屋市の大富豪から養子に所望せられた。初めの間は『小糠三合持つたつて』と男らしい事を云つてゐた、御大が社會へ乗り出して見ると、學生時代の空想とは大違ひ、金は道路に落ちてゐるものでなし、パンを求むるに大汗流す世の體たらく。一層どうせ世渡りするんなら樂に自由にと思ふて、勇氣凛々すつかり失せて仕舞ひ『ごうかそれでは養子に貰つて下さい』と男らしくない云分。遂に目的を達し彼れは學士風宜しく

乗込んで天晴れ旦那さままで済まし込んだ。貰ふた家ではパンに飢へた男を拾ひ上げたとは露知らず『學士様が花智ぢや』と一週間程祝宴續き、高砂やで目出度く收まつて事至つて平穩無事、四海波穩かであつた。

唯し穩かでないのは彼れの胸である、それは何かと云ふと彼れの姓名水野他吉である。不肖自らは勿體なくも學士である、それに他吉様とは親を憾むぞ。他吉と云へば全で丁稚小僧の名に相應しい。己れは幾程旦那様でござい顔してゐたつて他吉ちやサツバリ威厳が利かぬ。睨みを通らぬ。『他吉がなんだ』位にしか思はれぬ。

其處で彼れは養家改革の第一歩として姓名共に改變の大英斷に及

んだ、生みの親が聞いたら涙を流すだらうに其麼事も頓着せず『なつかしや我が姓よ名よ』とも云はずに突如として旬日ならずの裡に新姓名を發表に及んだ。平田潔と云ふのがそれである。

平田は養家の姓で之は仕方がないとして潔は慘愴苦心した選んだものらしい。潔！徹かに呼んでも大きく叫んでも學士らしい旦那らしい、有難や潔オヤ自分で自分を賞め過ぎて失敬と云ふ具合、

この平田潔君新姓名が出来たので嬉しくて堪らず早速海軍中尉竹山君に宛て自分は今回養子となつた左様御承知と出した。受取つた竹山君ハガキを見ると平田潔とある。ハテ己れの友達に此麼名の男はゐない筈だがと、よく手蹟を見ると紛ふ方なき水野他吉である

竹山は何時いつも軍艦ぐんかんばかりに乗のつてゐるから餘り法律上ほふりつじやうの手續てつてなどに關くわんしては知らぬ、養子やうしに行ゆけば姓せいだけは變かはるもので名なは舊ふるの如ごとしであると思おもふた、さうある可べきが實際じつさい又普通ふつうである。

然しかるに今いま之これに依よつて見みると、平田潔ひらたきよしである。フ、ン他吉たきち己おれの妻君さいくんを自慢じまんしたさに『きよし』と云いふ妻君さいくんの名なを使つかひやがつたナ、嬋か如あ來にめ一ばん冷評ひやう評かして遣やると許はり、

他吉たきちツ。相變あひからず斯かう書かいてみると他吉たきちは丁稚てうちしきだナ。その丁稚てうちしき他吉たきちが今度いまきよしと云いふ妻君さいくんと一いっ緒しょになつたと云いふ事ことが可笑おかしい。幾程いくら己おれが海軍かいぐん々く人で渴かつれてゐるからつて妻君さいくんの名前なまえなんか見みせびらかして浦山うらやますもンぢやないせ。寫真しゃしん送おくれ、終はりッ』

と、認しためボストへ投なげ入いれ、シテやつたり顔がで寫真しゃしんを徐おもろに待まつてゐた。

豈あに計はらむや、豈あに計はらむや、竹山たけやまは一週しうかん間程はたつ一通つうの又また印刷いんさつされたハガキを落手らくしゆした。それを讀よんで見みて驚おどろいた。

『小生せうせい今いま回かい左記さきの如ごとく改姓かいせい改名かいかう致いたし候間こうま今いま後ごとも偏へんへに御指ごし導だう宜いしく冀ねが上う候こう』

舊姓きうせい 水野他吉事みづのたきちこと

平ひら田た 潔きよし

ひえー逃にげろ逃にげろ。

◎カがあるぞ

「諸君、明日は郡視學と云ふお方が来て、僕が君等に教へる方法を見るんだ、頭は禿チョコだよ、僕等の欠點ばかり探さうとするんだから困つちまう。おノコリさせて上げてもらいたいんだけれど、年を老つてるから僕等如きの云ふ事を聞き入れがない。困つた事には僕は其の禿の下にあるんだから差當りパン問題の爲めに服従せねばならぬ情けない立場にあるんだ、で君等は此の僕を可哀想だと思つて同情を寄せてね——鱒を寄せることは違ふせ、温順しく側見をしないで、何々と名を呼んだら快活にハイッとして呉れるんだよ、そして其の所を讀めと云つたらドシドシ大きな聲で讀むんだせ、決して此

の先生の顔に泥を塗らないやうに、若し其の時に己れが教へ方が拙手だとするとあとで校長さんに叱られるからね——』
と、シミミ云つて聽かせた、
『フーン、不思議だなア、先生でも校長さんから叱られる事があるんだなア』
と一同不思議さうに顔を見合はしてゐる。
『そりや全で君等が僕に怒鳴り附けられる様に校長が己れにケンケン當る事があるんだよ、量見が好く無いねえ諸君』
今日は妙に僕が打解けたものだから皆蟹も大變喜んで勝手に質問を發する。

「では校長さんでも先生の頬べたを孤ねることがありますか」
 「校長さんは其麼野蠻人見たいな事は決して成さらぬ。然し萬々一彼の跛さんが其麼戯けた真似をしたら突然組み伏せて遣らア」
 之を耳にした口善悪なき連中、
 「ぢお僕等も今後先生に擲られたら組み附かうや」と香ばしからぬ事を相談する、

「ナニ君等の様な小つぼけ野郎なんか叩き墜してやらア、力があ
 るぞ、力が。若しや僕のトテも協はない奴が此の中にあるたら幾程でも
 擲り付けられる儘になる、其の代りごつさり點數を減いて幾年でも
 落第させる、ごうだい降参したらう」

先生で勝手なもんだなアと呆氣に取られてゐる、
 「え」と、始めよかな、野原に雲雀が鳴ク」

◎此の燒ケ獄め

視學官殿が愈々お出になる、視學官殿と云へば村では郡長様の次に位する豪いお方さまだ、何故ならば決して己等の様に饅頭を頬張つたり木登りしたり成さらぬ、運動會があると常にフワリと沈む皮の椅子に坐はられる。

視學官殿は人の注意の届かない所に眼を注がれるから隅から隅まで大掃除をして置けと校長さんが小使に命せられたので、小使さん
 キリ／＼舞ひしてゐる。

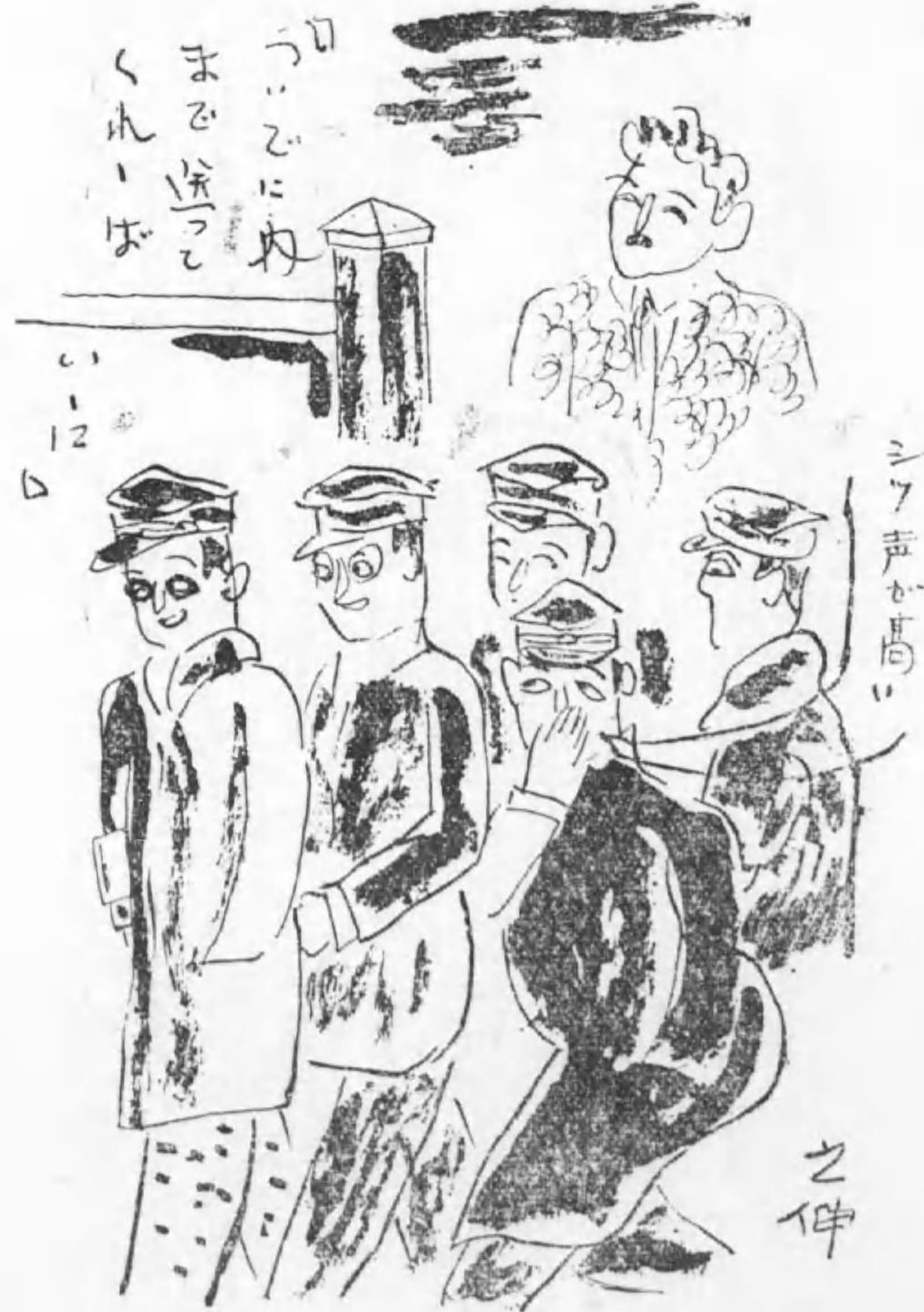
あの校長さんといつたら常に生徒には「先んじて衆の模範たるを
示し」と口を酔ばくして諄々と説いて被居る癖に大掃除の模範なん
て少つとも示され無い。其の點を考へると己れなんか不言不行で其
麼意見がましい事は欠伸にも出さぬ代りに遣つて見せもしない。

掃除が終つた、今度は校長が己達に、

「今日は決して手ぬかりの無い様に、延いては村の名聲にも關しま
すから」

とあつた。如何にも仰せの通りで御座いますだんべ。

「伊藤君は殊に未だ新しい方ですから御用心なさつて下さる様」
校長は視學官を全で掬模か何かの様に思ふてゐる。



『指名するにも平生よく出来る生徒を成る可く當てる様にした方が
良いと思ひます』

今だッ、一本突き込むのは、

『仰せ何如にも御尤も次第で御座いますが、只今校長さんが私に云
はれた通りで未だ新しい方なモンですから、へッへッ、それが灰兵衛
やら、どれが平左衛門やら、へッへッ』

校長は鶏が卵を生むような難かしい顔をして聴いてた。

『君はそれで済むと思ふんですか、責任を逃がれる事が出来ると思
ふんですか、生徒がブマな答へをすると、それが君の恥辱となるの
が解りませんか』



ハテ子。己れだつて口があるから云ふぞ。
 『私は有りの儘繕ろはない所を遺憾なく見せた方が最も當を得た策だと信じます、斯くてこそ教育の改善が行はれ、普及の功が現はれるんです、それを貴方の様に……』

『其れは理論だ、社會と云ふものは其麼ものぢやない、要するに君には愛校心がない』

馬鹿を仰しやい、己りや此の間生徒の助吉が鼻汁を搦んで机にべツとり付けてゐたのを見て「何故其麼汚ないことをする？」と直ぐ様紙で拭かしたんだせ、學校の器具だからと思ふたからだ、愛校の熱誠が溢るゝばかりあつたからだ、其麼事を云ふなら己れは今後火

鉢が顛覆かへつてゐたつて知らないよ、知らないよ。

『お出になりました』

と、小使がアタフタ知らせに来る、己れは思はず『禿ツちよが？』
 校長は振りかへつてグツト白睨んだが、簞睨だから、己れを白睨んだのか己れの側にあつた地球機を睨んだのか解りやしない、變てこな眼だ、右と左の隅っこへ黒ツ玉が別れて仕舞うんだもの、ほん〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇。校長は風船玉の様に飛んで行つた、己達も續いてお迎へに出た。

視學官殿は一名の腰巾着を連れて校長の案内で應接室に入つた、
 「君等はもう授業を始めろ」との御知らせだから、己れは相變らず

チヨーク箱を持つて教室の前まで行くと、生徒は餘り先生の來ようが遅かつたのでお休みと思ふてか相撲を取つたり、黒板へお馬を書いたりして遊んでゐる。就中一人の生徒は腰掛に坐つて、

「エヘン〜、昔源頼朝は」と己れの口調を真似、先生面して大喝采を拍してゐる、己れがガラリと戸を開けると、全で蜜蜂に刺された様に頭を抱えて各自の席へ逃げ戻つた。

「諸君、遅くなつて失敬、昨日話したレコが遣つて來たのだよ」

「先生レコつて誰れ」

「視學官様だよ、例のソラ」

「先生禿ツちよこ？」

「ウン、行儀を善くしてゐてくれよ、暫らくでいゝから」と、悟すと感心にも膝の上に手を載せる。

「地理だね、火山の所だナ」と、頁を開き、

「火山には活火山と死火山とある、活火山と云ふのは……」と、始めてる所へ視學官殿が校長に案内せられて入いつて來た。僕はもう辯舌が熱しかけてゐたから夢中になつて續けた、

「此の私が昨年あの有名な日本アルプスの燒ヶ嶽へ視察に行つた、憤煙空に渦まき、その物凄いと云つたら！ 萬目みな草と云ふ草、木と云ふ木は悉く熱灰の爲めに木ツ葉微塵に枯らされて仕舞つてた、實にひどい慘害だつたのであります。だから彼の山を遠くから

見ると、○全で禿頭の様に……」

「フと之は折も悪い失敗たことを口にしたもんだと気が附いて、遠くから眺めると恰もそらッル坊主の……」

慌てゝるから又此の通りへマを云つた。己れは己れの口が憎いとチヨツと抓つて遣つた、蚊が喰つたんだと生徒は思ふてゐたらう。

生徒は今日はよく先生たる僕の教へを守つて温順しくして呉れてゐたのは有難いが、笑ひを噛み潰して居るもんだから、皆廢の顔が松明の様に眞赤になつた、それでもよく我慢してゐて呉れたよ、オマイデイヤボーイ。視學官殿は十分も経たない内にサツサと出て行つて仕舞う、職務に不忠實な視學官殿だなア。

午後全教員を集めての講評に曰く、

「伊藤君のは態度も聲も宜かつたが、教育の仕方が何だか虫が好かぬ」

「後學の爲めに其の點を強つて仰しやつて戴きたう御座います」

「イヤナニ、云ふ程でもない」

云へないんだらう此の燒ヶ嶽め。

◎尊き師の恩

授業中ゴーツと物凄い濁流の音、昨夜の大雨の故であらう。

「皆さん、そら聞えませんかあの凄まじい音を。洪水は彼處のが暴れると起るのです、さて今俄かに洪水となつて、上からドツと押寄

せたとすると諸君は何うします？」

「逃げます、山へ逃げます」

「木へ登ります。」

と、どいつも此奴も己れの質問の急所を外れたの許り。まだ己れの真意が解らないと見えるな。

「諸君は一人で逃げるんですか」

と、仄めかすと漸つと了解出来たと見えて郷六が、

「親を助けて逃げます」

「ウム、よい心掛けだ、其の心があつてこそ渡邊華山の様な親孝行者になれるんです。また外に」

「佛さんを持出します」

「これも宗教心の厚い家の子供の考へとしては尤も千萬、次は？」

「お金を擔いで出ます、てないと乞食になりますから……。」

高利貸勘左衛門の子金左衛門だナ、此の親にして此の子あり、どうせ此奴なんか碌々食ふのも止めて爪で火を點す輩さ、金箱を背負へば全で身體に鍾を括つたも同然、金が土に變つてブク／＼土左衛門さ、返事を與へる丈の價値もない。

「この外に？」

黙つて顔を見合はして居る。

「考へて御覽、皆さんはもつと／＼大事な事を忘れてゐます、思ひ」

出ませんか、情け無いぢやありませんか、え、自烈たい、若し立派に適中た方には行狀點甲を附けます』

とまで云つてるのに、まだ考へてゐる。突然一人は立上がつた。

『先生、私は先生を助けます、私が死んでも先生を助けます』

オ、それ、それ。

『諸君、此の小田先生を助ける事を忘れましたか、三大恩を滅却したんですか、第一は君の恩、第二は親の恩、第三は師の恩です、師の恩は親の恩よりモット大切なんです、實際云ひますとね。其の先生を置いてけぼりにするとは。して見ると諸君は此の小田を見殺しにするんですね、アブ／＼しても構はないんですね、師の恩は何ん

と心得ますか』

萬場寂として聲更になし、與吉は又手に唾を付けた、先刻己れが、ツンを喰らはした頭の瘤へ附ける爲めだらう。

『よく云つた事が呑め込めましたか、さて大洪水が出た、誰方様を眞先に助けますか』

『先生です、伊藤先生です』

『そうです、忘れては成りませんよ、合唱ひ給へ一緒に』

と、己れも聲を合はし、與吉までが泣面して、

『とーとーオキイ師イのおーん……』

◎尻から三番の先生

子供で御菓子を食べ事つたらそりや早い、それは我慢する、人の噂とか何かを聞き堀つて来る事も傳書鳩の様に早い、此れは我慢出来ない。何故かと云ふと一日斯う云ふ事があつた。

子供の時は誰れでも一番頭腦のいゝものだ、だからウンと遊んでウンと勉強しなくちやならん、解りましたかナ」

と、先生並に道徳的に云つて聞かすと、詰らない顔をしてゐる、修身で眠いと云ふ事は己だつて中學時代にはよく知つてゐる。だけれど現に斯う遣つて己が口角泡を飛ばして「孟子曰く」式を教へて居るのに「ホーラ鳥が来た」なんかで外に夢中になるんだもの、己だつてムイツとしたから其の二三人の騒ぐ子供の所へ駆け付けてポコン

く拳骨を喰らわさざるの止む無きに至る、蓋し萬已むを得ざる事と信じ、其の方法を以つて最も適當なりと思ふたからだ。

『馬鹿ッ、今日は拳骨だけで勘念して遣る、今度から又騒ぐと柔道でもので首しめて眼を白黒させて遣るぞ』

と、嚇し付け、他の恐怖に襲はれてゐるに乗じ、

『で皆さん、皆さんはお互に競争して一番か二番の成績で卒業しなぐちやならぬ、すると立派な者に成れるんです、何よりも心掛けが

肝心だ、己れなんかでも……』

と、ツイ口が這つて思はずつぐんで了つた。

『先生は學校を何番で卒業しましたか』

胸にギクリ。

『日本で有名な和田垣博士は矢張り心掛けが良かったので何時も上成績で……』

と聞かぬ振りしてゴマかしてゐるのだが、又しても『先生は？』と訊く、相變らず言を左右に托して鋭鋒を避けてゐると、其の内の一入ごこで何うして聞いて来たのか知らないけど、『尻ツ尾から三番』と小聲で傳へる、オヤ／＼と夥だしく先生の權威を失墜せしめたが己は早速時局拾収に取掛かる。

『如何にも此の先生は尻ツ尾から三番で卒業した事は白状する、何故其麼悪い成績で卒業したかと云ふと、原因があるんだ、此れを見

せて遣らねば眞實にしまいから』

と、己れは洋服を脱ぎ、シャツを脱いで腹部を見せ横に走れる傷口の残痕を示し、

『此の先生は何時も一番だった、此の通り盲腸炎と云ふ病氣になつたんで、半年學校を休んだ、普通ならば落第されるんだけど、平生成績が特別に良かったので卒業出来たんだぞ、だから三番だったのだい、勘違ひするなよ』

と躍氣となつて自己辯護することゝ。

眞裸になつたので寒くてブル／＼したが、その感應があつて生徒も信じて呉れたのでホツとしたが成績の事を云ひ出すと、己れは直

ぐ受持先生の所へ御百度参りして何うやらお情けで卒業て貰つた古事が思ひ出されてツイ〜気が滅入るからモウ再び修身の時に口外しない事にする。轉んで傷けたのでも盲腸炎だなどゝ赤い顔して辯明しなくちやなら無い羽目に墜るからね――

◎二杯の飯よ

今日は生徒を山遊びに連れて行く、三里もある道程だ、疲れると不可ないと思ふて、僕は胸羅聲張り上げて『道は六百八十里』を歌ふて皆磨に合唱させる。先生と云へば名はいゝが、事實は單に子守役に過ぎぬ。且つ又急にお腹が痛いなどゝ云ひ出すと、水を吞ますやら脊中を叩くやらで御醫者様の真似までしなくちやならぬ。先生

と云ふ者は鼻垂しに『いろは』の手解を教えるものだと思ふは誤謬も甚だしいではないか。

何うして村の子供は幾程文明ないから彼磨頓問な質問を發するんだらう、生徒の彌吉が己れに此磨質問をするんだもの。

『先生、俺先刻から膝が痛くて〜何うする事も出来ませんから、膝に穴をあけて仁丹をつめ込んで不可ない？』

『其磨、バ莫迦な』

『だつて先生、仁丹は萬病に利くと云ふんだもの』

呆れて物が云へない、總て斯かる思想上にある者を相當な頭にこなすんだもの、大概のこつちや無い。

小高い山の廣場に出たからピリ／＼と笛を吹いたら再び集まるんだよと云ひ聞かしてお別れにする。鬼ごっこするやら、源平するやら大騒ぎ、彼等は各自の天真爛漫を盡して嬉々として遊んだ。僕は小松原の影へ行つて腕を枕にグーッ。

醒めて屹驚、時間は五時間も経過してゐる、驚いて笛を鳴らし、人数を調べて見ると彌吉一人が見當らない。誰れに問ひたゞしても先刻から姿が見えなかつたと云ふ。さては「神かくし」に遭つたのでは無いかと、己れは日頃の沈着に似せず慌て出して血眼になつて探した。オーイと此方岸から向ふ岸の者を呼ぶ様な聲を出しても聞ふるものは木魂の響きばかり、松風颯々として日の暮れるのも近い。



カ 神はては

イーオ

之仲

彌吉は心から己れは大嫌ひな生徒、何故つて彼奴輩なんだもの、教室で彌吉に指命する時なんか「彌吉ッ」と己れは全で「汽笛一聲新橋を」見たような大聲を張り上げて遣らなくちや聞えないんだもの、だから僕は彼奴の名を呼ぶ毎に咽喉から血が出る様に思ふ、浪花節語りぢやあるまいし、大きな聲を出すものだから其れだけ呼吸量が多くなる、吐く量に熱が交つてゐるから従つて其の發散が平生に比して澤山だ。腹が空くとなる。だから一度彌吉に指名したが最後、少くも晝飯より二時間も早く空腹を感じる。一個の彌吉の爲めに五杯喰ふものなら六杯を餘儀なくされる。單に口でこそ一杯増したのに過ぎぬが之を月に積り年に積つたら、己は其の金で銀時計でも買



へるかも知れないに！。彌吉は實に斯の如く不埒なるが故に我輩から忌み且嫌はれてゐるのである。

『先生、彌吉が見附かりましたよ』

己れは高山彦九郎の様に天を仰いで長嘆してゐる時、生徒の一人がお月様が二つに割れたかの様に息セキマキして知らせに来る。

『ウーン？ そうか』と怒りと一筋の光明を得た喜びを以つて、僕は其の後から續いて走つた。

其處はコンモリ茂つた森の中、晝なほ暗い樺の下蔭に彼れはグツスリ寝轉んでゐるではないか。烈しい憎惡の念で僕の頭の中はカーツとした。『彌吉』ツと大きな聲を上げたつてツンボとさきてゐるから

聞えさす迄には大分手間がとれる。僕はよく／＼虫の居所が悪かつたから、マツチを摺つて其燃え残しをチューと鼻の穴へ突き込んで遣つた。彌吉は機械水雷で爆發した様に飛び上がった。そして盛んに蒸氣汽鐘の様にシク／＼泣き出した。

『何故寝たりするのか』と、僕は彼の耳元で非常汽笛を鳴らすと、ペコ／＼謝意を表して、

『先生勘忍して、オーン、オーン』

と、シャクリ上げて止め度もない、僕は實際云へば先刻あの通り寝てゐたので、云はゞ彌吉より早く目醒めたに過ぎぬ、云はゞ眠つたと云ふ點に差異はないと妙に同病相憐れみを感じた。一體己れは割

合に感情に跪い方で、他人が泣きさへすると、其れで總ての罪が消滅した様に同情する悪い癖がある。だもんで頬べたを三つ程失敬して遣らうと思ふてゐた氣合も次第々々に失せて、其の儘堅く今後を誠しめて大目に見て遣つたが、大目に見ることの出来ないのは僕の腹だ。晩飯は何うしても二杯の臨時超過だらう。それだけ飯があるか知ら！『諸君、雄飛せよ、南洋へ北米へ』と咆哮して六百の聽集を舌端に翻弄せし往年の面影そも何處にかある！

二杯の飯よ。二杯の飯よ。

◎師、師たらずとも

僕は一日僕の友人からウイスキーを買つた、日本の酒よりも二十

倍も強いんだもの、一嘗めしてさへ舌がちり／＼する程キューとくる。或日僕が當直の時、林と云ふ生徒が遊びに来た、折柄何んの御馳走もなかつたから、僕は其の饈を取出し、砂糖をどつさり交せて『君、之を呑んで見たまへ、非常に甘いんだよ、ソラ僕の口を見ろ』と舌鼓を打ち、あゝ旨いを連發して、

『呑みたまへ、よ君』

と薦めると、一息にグーッと呑み乾した、暫らくすると、耳から顔へかけて眞赤に染まり、

『オイチニイツ』と、體操を始めたなり、

『やア約れた／＼、大きな鯉が、先生ホラ』

「確つかりしろ、池が何處に見える？」

「ウーイ、い、池か、池かい、池はなア！」

奴さん先生に對する敬語を悉皆忘れてゐる。酒に呑まれる様ちや將來が思ひやられる。

「先生と僕は友達だよ」

此麼鼻つ垂らしがよくも其麼口をと思ふたが、場合が場合だから

「ウン友達だよ」

「う、う、嬉しいな、箱根の山は天下の嶮……ばん丈の」と、云ひつゝヒョロめいて己れの頭とコツンする、火打石ちやあるまいし……

「おとうさん何故其麼にお母さんを打つんだよ！」

かアさんよ！何故とうさんの胸倉掴んだりするんだよ！

よつぼど此の兒の家は亂れてゐるんだナ、

「御辨當を持つて行かないから喧嘩を止めて！」

して見ると家貧にして食裕ならずの方だね、親不孝の子もあるものだ。親が一杯の飯にさへ争ふてゐるのに此の子生意氣にも西洋の酒に砂糖を交せて酔ひ狂ふてゐる、己れの生徒は之れだから氣をクサして仕舞ふんだ。第三者に云はすと屹度己れを「これでも先生か」と悪く云ふかも知れないけど「師、師たらすとも、弟、弟たるべし」の金言を忘れて何うする？ 確か先日詳しく講義した筈だが……。

◎狂はなければ

作文の題に「なんでも思ふ通りを書け」と勝手に書かしたことがある、仲々面白い答案がある。

『私は小田先生が誰れよりか一番好きです』

實際又此の答案が一番俺の氣に入つた。

『今朝姉さんと喧嘩しました』

ヤレ、喧嘩を行つたのかい、僕とはい、兄弟だ、悪い點は附けぬぞ、安心し給へ。

『私は遊ぶことより勉強が好きで家へ歸へると直ぐ本を讀みます』
嘘付け！ 誰だい此處事書いた奴は……金森か、吾輩は組みし易くは無いぞ、此奴どつさり點を減じて遣る。

『私は家へ歸ると直ぐ何か下さいと御母様に云ひます、口ぐせに成つてゐますから何か喰べて口を動かさないと物足らぬ氣がして其の日は勉強も何も出来ません、お母さんは悪い癖だから先生に告げると仰しやいますが、此の事だけは告げられても仕方ありません、無い時は佛壇でも探します』

此れは一番の書いたんだ、流石見立が面白い、尤もの云分で先生も一言もない、若しお母さんが告げにお出になつたら『此の先生だつてそうなもの、わけて小さい子供です無理ありませんや』と告げて遣る積りだ、實際吾輩も經驗があるから存じてゐる。

根が道樂者の吾輩の事、學校の様子が知れるに従つて遅刻する、

缺席する、校長は何時も溢面を作つて『困つたなア小田君には』と時々洩らす、幾程洩らしたつて少しも此方には反應がない、無い理由があるんだ、郡視學と僕の家とは親類なんだ、その視學官が此の學校へ僕を世話して呉れたんだ、其れを校長が知つてるんだから若し僕の首を刎ねて見い、校長の首も亦何うにかならぬとも限らぬ、それだから吾輩が威張つても校長は溢い顔して何麼事をしようが黙殺せねばならぬ。然し校長も餘り僕の遅刻が毎日のやうに激しいからだつたのか、或日例の如く出勤すると、確か八時の所にある可き筈の針がズーツと早まつて八時半に成つてゐる、察するに校長は僕に注意旁々斯うしたんであらうが、僕とて覺悟がある。教員の澤山

集まつてる面前で『一體役場の時計と、田舎の學校の時計程當てにならぬ物はない、此の時計は卅分も早まつて居る、僕は明日から此麼時計を信じて學校へは出ない、馬鹿臭い！』と、云ひ放つと、校長は厭な顔して、

『ちや確つかり直して置くから以後遅刻しない様にして呉れ給へ』何だと、

『僕が幾程遅刻しないで出勤うとしても肝心の時計が斯うだから仕方がないさ』

『ちや早速直します、明日からもう少し君も早く出て呉れ給へ』と、校長は折れて出る、校長も一生涯中學校卒業生は教員に持つま

いと此の時思つたらう、翌日から急に方針を變へて八時に始まるのに七時前にチャンと出勤する、勿論誰れも来てゐない、聽てポツポツ出勤くる。校長は七時十五分頃にノソノソ遣つて來た、僕の云分が面黒い。

「時計さへ狂はなければ此度もンですよ」

◎妙な缺席届

試験前に勉強を始めるのは何だか憶切に感ぜられる、明日こそと力味んでも翌日になると又ガツカリする、或る物を書かねばならんと一生懸命思つてゐても何だか筆を執る氣が出て來ない、氣が進まない、それ等を總稱して名付けて着手の臆病と云ふ。

學校の教師なんかしてゐると、殊に此の臆病を感ずることが烈しい、際限がない。さうだらう考へて見たつて了解るぢやないか。今日は教室で『地球は圓い』と云つたつて生徒は眞實にしないんだもの。

「嘘だ、際限がないものだせ先生」とくる。

「イヤ慥かにさうだよ」

と、口を酢ばくして云つて聽かすと、

「それちや先生は歩いて來たんですか、南極も北極も見て被居やつたんですか」

と、皮肉る。凡そ宇宙なるものはと説明したつて鼻糞はちくり連に

解るものぢやない。で僕は「とにかく無理無體に圓いものとして置け」と壓制的に得心させて置く。

そして、

『我々の此の地球は間斷なしに動いて居るものである』と、説明する。

『其麼馬鹿なことありやしない、先生は僕等が子供だと思ふて侮るぜ』

と云ふ反抗的な顔付してブーンと膨れるんだもの、そして、

『若し先生の有仰る通りだつたら俺達は毎日護謨玉を轉がした様に彼方へコロリン、此方へコロリンして身體が達磨の様に脹れ上つて

了ふ、先生は偽吐だい』

と、征め立てる。

『決して偽は吐かない、その證據には晝があつたり夜があつたり、月が出たり出なかつたり太陽が上つて又下がる、あれは皆地球が圓い故だ』と云つて聽かすと、

『ナニあれはお天道様なり又お月さまなりが自分勝手に動くのだい』と、主張して止まない、そう云へば如何にもそうらしい、己れも中學にゐた頃居眠りばかりしてゐたから此の事は確つかと斷言は出来ぬ、地球と太陽と月とが鬼ごっこしてゐたらしく覺えてゐるから……ハテナ。

とにかく己れは近頃切りと着手の憶病を思ふ。同じ教室で一定不變の權兵衛太郎作連の生徒の顔ばかり見てゐて「諸君」「皆さん」を繰り返へしてのみ居たつて何んの面白味もない、生徒もさぞかし鬼瓦の様な己れの顔には興が無からう、偶には林檎とバナ、をつき混ぜた様な變チクリンの顔を見たいだらう。僕は僕自身にも生徒にも敬意と同情を表して明日は缺席することにしやうと、宿へ歸つて、早速缺席届を書き認めた。

『小生儀昨今に至り俄かに着手の憶病を感じ何うしても出席する氣になれず、斯かる場合強いて出席せむか、生徒の顔が仇敵の様にははれ、面と云ふ面を搔撈りたく相成る心理状態に陥り申可く、洵に

誠む可く謹しむ可きこと、存じ斯くては愛子にも似たる生徒に對し實に相濟まぬ事と推測仕り候ま、遺憾千萬ながら明日缺席致す可く此の段お届申候也』

◎雨か嵐か

『其の後暫らく失敬、君が小學校の先生と濟まし切つて顔を見る爲に僕と舟上と二人で突撃するせ、何麼様子して教へてゐるかそれも親しく實見の光榮に浴したいんだよ、僕等は君が其麼厚がましいことを仕出かして居るのを大なる奇蹟として認めてる。土産には鶏一羽持參するから鍋の用意怠るな』と、吉野からの來簡、面倒な連中が舞込んで來るなア、今更斷はる譯にも行かないが、冀願くは吾

輩の威嚴を毀損しない様に。

二日経つた、二人は草鞋履きで鶏一羽荒縄で縛つて遣つて来る、何處かでケケッコと鳴いてた奴を其の儘グイと締めて九十九ヶ年間拜借と云ふ手を遣つたんぢや無いか知ら、誰れの眼からもそう見える。それが小田ツと怒鳴り込んで来るんだもの、近所隣りに住んでる生徒の手前も考へて貰はなくちや。

天氣が宜かつたから一同散歩に出掛ける、散歩と云つても水車小屋か、凸凹のある野の道だ、野趣愛す可しとはおろかな業、見る花も流るゝ水も癩の種ばかり。

折柄ズツと向ふで僕の姿を認めた學校の生徒が三四人バタ〜と

我れ遅れじと駈けて来る。そして早くも道端へ立止まつて十間も彼方で、帽子を脱いで叮嚀にお辭儀するから己れは軽く頭を下げて答禮し、

「遊びに行つて来たね？」

「ハイ」

「明日の下調べを怠つては不可ないよ」と、先生聲で心ばかり誠めた、時もあらうに二人の者等、

「ウフ、ウフハ、ウフハ、、、オイ生徒君此の小田て奴は」

奴とは何だい、生徒の前丈けは假初めにも先生の體面を保たして呉れなくちや、あゝ遮莫、遮莫、友遠方より來たる又苦しからずや。

宿へ歸つた、婆さんを呼んだ。

「あの鶏を料理して呉れたまへ」

婆さん眼玉をキヨロつかせて、

「何を云ひますだ、鶏を殺すと鶏に化けて生れるのを知らんのけえ」

「現今其麼阿呆な事が世の中にあるもんですか、都人皆殺したり喰つたりするよ、旨いもんだせ」

「ちや地獄へ陥るだ、南無阿彌陀佛」

仕方が無いので、毛を撈り、首は將門の首をチョン斬る様にして撈ぎ取り、漸つとこさで料理も終り、聽て食事も済んだ。

明日は僕の教授振りを參觀すると云ふ、そして若し生徒が此の名

譽ある參觀人を前に控へて、不謹慎な行動があつたら容赦なく、一人一人の顔に墨で髻を附けて遣ると云ふ、己等が教室へ足を入れた時、様は生徒一同に「起立、禮」をさせろ、若しさうしなかつたら此の小田先生は中學で二度落第したんだと曝け出して遣るからと無理無體な申分ばかり、己れも浸浸此麼惡友連と刎頸の交りをした事に就いては楠正成が討死したよりも更らにより一層悲しく思ふ。

雨か嵐か、己れの頭のがらぬ明日の日よ。

◎ 變なお菜

場所が邊僻だつて餘んまりの仕打ちだ、下宿ぢや「先生さま」と、それは大事にしてくれるんだけど茲へ来てまだ一度も牛肉一切れ喰

はして呉れない。朝はお定まりの様に鉄のお汁だ、今日で二十日も
 續く、婆さん僕を金魚かなんかの様に思ふてゐる。己れは毎日鏡と
 首ッびきしては眼玉が金魚の様に飛出やしないかと、細心の注意を
 拂つて心配してゐる。

晝飯は何時も茄子ばかり、きりきりすちやあるまいし。晩飯は殆
 んど鰯だ、鶏を飼つてゐる氣でゐるらしい。

斯くの如く我れは金魚ときりきりすと鰯の生活を送つてゐる。己
 れの家のポチの方が己れよりか何麼に贅澤だかも知れない、彼犬と
 なると牛肉を喰べなくちや承知しないんだもの。

「婆さん、何か少し變つたものを喰はさして呉れ給へナ南洋の土人

の様に定まり切つてゐるんだもの、後生だから」

「先生さま、お氣の毒で御座いました。お晝は御馳走すべし」
 と、あつたから大に期待して辨當の蓋を開いて見ると、豆だ。ヒヤ
 ア今日からは又鳩ほつぽ!!

◎英語の威力

僕の教へてゐる村の生徒と云つたら碌々西洋人の顔を知つてゐる
 ものが少ない、だから僕は西洋人と云ふものは眼の玉の青い髪の毛
 が金色をしてゐて、皮膚は全て石灰と臙脂をゴツチャした様なもの
 だと聽かしてある位だから況んや其の聲をや、況んや發音をや。

だから僕が外國の言葉を知つてゐると云つた時この己れを全て切

支丹バテレンの様に爺さん達が罵しつたが、僕は其の時現今の豪い人や學問のある人は皆英語を知つてると云つたら、ちや俺等の村長様は知らねえが何うした譯か合點させてくんねえと出る、村長様ほど勢力のある者はないと考へてゐるんだもの、あれは老人で徳川時代から生きて御座るのだから何うでもいゝのだと口を酔ばくして説明したら始めて漸つと領いて、異人の言葉を知つてる者は立派なものとして了つた、親でさへそうだもの、子供の生徒になると猶更尊敬の念と云つたら凄まじい。

それをチャンと己は知つてゐる。だから生徒をして己れを尊敬しろ〜と云つたつてソウは問屋は卸さぬ、それちや何を最上策とす

るかと云ふと、英語の本をペラ〜と雀の様に早口で讀んで見せることだ。

で或日僕は十分の休憩時間に生徒が皆運動場へ遊びに出て一人も残つてゐない内に、素早く細かい英字の本を机の上に載せて置いた荒い字のだと彼等は此の本は英語で書いてあつても字が大きいから屹度英語の「いろは」と考へる憂があるからだ。

時間がきた、鐘が鳴つた、生徒はドヤ〜と教室へ入込んだ。己れは隣室から壁の穴を通して密つそり様子を見てゐる。

「やア此の本は英語だせ」

「やア此の繪は鯨だ、潮を噴いてるなア、日本の鯨と違ひつこね

「えや」

「此こ應な細こい字かが讀よめるんかなア、西洋人せいやうじんは吝けつ坊けで不可いねえや、紙かみが惜おしいもんだから」

と、各自てんでに批評ひひつしてゐる。時分じぶんはよしと己おれは咳せきしながら戸かどを開あけて登壇さうだんした、そして挫くつかと椅子いすに腰こしおろし、徐おもろに先刻さつきの本ほんを取とり上げて口くちを動うごかした。そしてウン／＼と頷うなづき一寸ちよつ笑わらひを見せて直すぐ次つぎの頁ぺいを開ひらき、ウン／＼、ウフツと可笑をかしく無ないのにアハ、ハ、ハと云いつて見みせるものだから生徒連せいぞれんは屹びつ驚くろ仰うや天てんして、

「オイ、先生せんせいは讀よめるんだせ」

と、アングリ口くち開あけて感心かんしんし切きつてゐる。

「ねえ皆みなさん、何時いつも日本にほんの御話おはなしばかりでは詰つまらないてせうから今日けふは一つ外國ぐわいこくのお話はなしをしませう……孰どれに仕様しやうかな」

と、頁ぺいをめくりながら士官しやくわんが劍けんを抜ぬいて突撃さつげきする所ところを出だし、其それをズーツと見みせて、「此この繪ゑの所ところを話はかしませう……え」と

「Dog, Cat, desk, book, teacher, tree, long, short……」

と、口くちをモチツたり舌したを引込ひきこませたりしてナイヤガラナイヤガラの瀧たきよりも早はやく讀書りやうして、先づ第一だいいちに感動かんとくと驚駭きやうがいを拍うし、

「之これを譯やくすると斯かうだ、英國えいこくに戦争せんそうがあつた時とき一方いつぱうの國くにが稍やもすると他方たほうから壓おさへられ氣味きみであつた其その時とき一人ひとりの士官しやくわんが國くにの難儀なんぎを救すくふのは此この秋あきであると劍けんを振ふりかざして進すすめツとばかり……」

と、懸河の辯を振うと、茲で始めて親愛なる小田先生の價值が解つたと見えて、

「校長さんより豪い、西洋人の通りかも知れない」
有難いもんだ、中學にゐた時確か英語丈は何日も住意點ばかりだつたつけ、そして一ぺんカンニングして停學を喰らつたつけ。

天知り地知らず、壁に耳あつてなきが如し、英語は喋べるに役立つず法螺ふくに即功恰も神の如く迅速なるを悟つた。

有難いかな舊師オツチヨコチヨイ先生、僕は此度時でなくば先生の御恩を思ひ出せないんだよ、感心なもんでせう。

オ、そうだ、己れが中學一年生だつた頃一度此慶事があつた、或

日、明日の英語は何うも己に指命れさうだから下調べしなくちやならんと思ふてゐる時、松本と云ふ友人が慈善音楽會へ行かうと誘ふたものだから其の歸りが遅くなつてツイ失敬しちゃつた、翌日又朝寢をしたもんだから「君、此處の意味は？」と訊く間もなく鐘が鳴つた、運は天に任かしてと己れは觀念の眼を閉ぢて着席した。

先生が來た、例の黒光りの闇魔帳を廣げた、關ヶ原だ、頼むから何卒僕に當てない様にと机の下で手を合はして拜んだが「小田ツ」と指さゝれた時、己れは御利益のないのが小面憎くて仕方が無かつた、此間御賽錢を上げたのを忘れたのか知ら、頭腦の悪い神さまもあるものだトブツ／＼云つて立上つた。

立上がつた迄はい、が、何が何やらサツパリ解りつこない、フと
繪を見ると子供が帽子を持つてゐる、なアに二句丈け譯すればい
ゝんだから當るも八卦、當らぬも八卦、まゝよと覺悟を定め込んで
『茲に一人の子供が帽子を持つてゐる、彼も今から散歩に出掛けよ
うとしてゐます』

なにも彼麼に大きな聲を出さなくつてもいと思ふ位皆麼はお腹
を抱へるもんだもの、オヤそれちや違つたのか知ら、失策つた！と
思はず頭を搔くと、

『何處に其麼事を書いてある？ 調べて來ないんだナ、宜しい、河
本』

己れは止むを得ず坐つた、屹度マイナスを採點られたらう。
河本はスラ／＼と斯う譯した。

「茲に貴方は何を見るか、私は茲に一人の立つてゐる子供を見ます」
ヒヤア大變なれの八卦!!

◎變なお伽噺

ほんとに子供ほど御話好きなものありやしない、御伽噺めいた
事さへ話して遣ればチウともスウとも云はずに黙つて聽いてゐる。
其の静けさと云つたら！ 其の温順しさと云つたら！。さるにても
己の育てゝる生徒に碌な奴ッて一人も居やしない、鼻ばつかし垂ら
してゐるんだもの、そのみならず御伽話をすると口を切ると、

苦い顔一つしない。これが抑々彼奴等が零コソマ以下であるといふことを證明する、さうだらう若し後日相當な人物になる様な者が伏在してゐたら、其麼詰らぬことよりか少しでも新知識を與へて呉れ、ばいゝのに低級な先生もあればある者と思はねばならぬ筈だのに！ 見る僕が御伽噺をすると云つたら、あの喜びハツシヤグ様と云つたら！ 皆が皆まで急に晴々しい顔付に急變する、平生手の付け様のない悪戯ツ子までが揃ひも揃うて品行方正面するんだもの、小づら憎くなる。

だからさ己だつて致へ甲斐がないんだ。育て甲斐がないんだ、天晴れ不出世の英雄の片割れでもいゝから此の中に潜んでゐるんだつ

たら己も此麼不真面目な先生にはなりやしないんだよ、須らく吾人の渾身の勇氣とあらゆる能力と全學力を披瀝して……己のことは中學を尻ツぽから三番に出たんだけどさ。

「お話をしようか、それとも算術を始めようか」

と、故意と聞えがしにつぶやくと、

「先生。せんせ——い。御話を、御話を」

大方さう出るだらうとは知つてゐたし、己も其の註文を待ち構へてゐた、と云ふのは外でもない何時までも〇〇十〇でもなからう、茲へ7が立つから7と斯う書いて、と毎日々々お定り文句を並べるのがツクツく厭きちやつたんだ。〇〇十〇の答に9が立つたり3が現は

れると些ツたア興味を感じぬでもないが……。

『さア何うしようかなア——』

と、勿體振つて一寸すねて見せると、

『せんせ——い、せんせ——いよ』

囁々躍氣となつてせがむから時分はよしと、

『それぢや話するよ。黙つて聽いてるんだよ』

と、云つたものゝサツバリ腹案が無いんだから急に口から出ない、

『オホン、……えいと……オホンオホン』

と風邪も引かないのに咳計りを連發し、

『静にして……オホン』

何を云ひますだ

鶏を殺すと

鶏に化けて

生れよのさ

知らん

けえ



之伸画

以後決

して

心ず

吃度

之伸画



椀白さん連鳴を静めて今も口から何か洩らすか耳を済まして呉
 まつてごちやる、今は之まで、行きあたりバツタリと臍をしめて、
 『昔し昔し先づ或る所に爺さんと婆さんとあつた、爺さんは柴刈り
 に婆さんは川へ洗濯に行つた』

皆歴ケロンとしてゐる。

『婆さんが洗濯最中川上から大きな桃が浮いたり沈んだりして流れ
 て来た、婆さん吃驚仰天なんと大きい桃だらうと杖で引き寄せ、其
 の儘盥に入れ、早速庖刀を取出して割つて見ると……』

先刻からガヤ／＼仕出して静まつてない、行儀の悪いつたらあり
 やしない、其歴話は疾づくに知つてると吐かす奴がある、就中昔

聞いたと高慢シヤクれた口を利く者さへある、高が十歳そこらが昔ださよ、昔とは十年以上を指して云ふ言葉だせ、知つたか風するにも分際がある。

「先生、知つてます、桃太郎が出たんでせう」

「桃太郎だい」

「鬼ヶ島へ行くんだい」

え、ツ喧ましましたら！

「あゝコハそも如何に、婆さんは腰を抜かして思はず其處にひれ伏した、稍暫くして拜むやうに首を擦げると金色の光り眩ゆき一羽の大鷲ではないか」

それ見ろ面白くなり掛けたもんだから期せずして黙んまり出した、桃太郎なんか出すもんけえ、先生の思想と生徒との思想は違ふんだよ、月給まで貰つてゐるんだもの、變化の妙を俄かに急造する丈の腕前はあらア。

「所がお爺さんは却々慈悲深い人だが、此の婆さんの慾しんポイントでない、で婆さんは斯う思つた、此塵美しい金色の鷲だからヒヨツとすると御腹の中に金剛石の塊でも持つてるかも知れない、爺さんに見附かると屹度可哀想だからと放して仕舞ふだらう、さうだ今の内に殺さ無くちやと、臺所から砥ぎ立ての出歯庖刀を引下げて鷲の脳天目掛けてグワーツ、素早く其の腹を立ち割いて見た——諸君

諸君は何を婆さんが其の時掘り出したと思ふ？」

「金」

「五色の玉」

「珊瑚」

ど、口々に我れおとらじと勝手な熱を吹くわ吹くわ。

「皆座違う、適中たら百點附けて遣るぞ」

あ、彼の騒しさ！糞を食め。

「静まりたまへ、……婆さんは手を入れて探つた、無い又探つた、

とうとう彼女は掴み出した、何だらう、汚ない汚ないその腸を！」

ナーンのこつたいと一同ボカンと狐に欺されたような顔付してゐ

る。

その筈さ己が全つきり欺したんだもの！！

◎木乃伊ごっこ

他の教師連は非常に怒り心頭に燃えた様に彼の遊戯をした子供を
貶すけど、己れは又何うして生徒が木乃伊と云ふものを知つたか其
れが不思議で堪らぬ。あの中には屹度上野の博物館へ見物に行つた
子供があるのかも知れぬ。油断は出来ないぞ、己れはまだ東京を知
らないんだもの。

實際氣拔な遊びを始めたものだ。

日曜の日に、子供が互に誘ひ合つて田圃の側の丘へ來た。始めは魚

釣りが目的だつたとかで釣竿まで擔いで出掛けて来たんだが、あひにく何うした拍子だつたか、誰れも一尾も釣り得ない。其處で子供のことだから直ぐ遊び出した。

「木乃伊ごつこをしようぢやないか」

「木乃伊ごつこつて何うするんだい？」

「生理めにするんだい」

「死んぢまうぜ」

「眼と鼻の處へ穴を明けるから大丈夫だい」

と、相談が纏まつて、一二三とジャン拳をし、負けた奴が愈々埋められる事になつた。一人はツイ近くに打擲つてある鉄を持つて来て、

早速穴を掘り出した。疲れると代るく代つたから、見てゐる裡に一人位は横はれる様になつた。

約束通り眞裸にして、五體を延ばさし、動かない様に足と手を括り、上からドン／＼土をオツ被せた。そして僅かに眼と口だけは空氣を通はし、二時間したら又改めてジャン拳をして次の者が這入るから、其れまで辛抱してゐると一同は小川へ石の投げつこに出かけた。

話代つて此方は活物人間の事、苦しさに紛れて頭を動かさし口も開いた。すると上から柔かい土がドカ／＼と落ち込む、息がつまりかけたから益々悶いた。土はドン／＼唯一の穴を埋めた。彼れは死人

の如くなつた。

其處へ百姓が通つた、何だか土がムク／＼する様に思はれたので、試みに足で踏んで見た。ウ／＼と聲が聞えたので仰天して腰を抜かし、出して見ると右の始末、何時しか此の事が校長の耳に入り、教員全體に傳つたのである。

校長の意見としては『折よく見附つたから善かつたものゝ、若し見附らないとしたら、子供は死んで仕舞ふ、學校が其麼惡戯ツ子を育てたどあつては、あらゆる非難を一身に受けねばならず、直ぐに免職だ。再び斯様な悪い遊戯に捉はれない様にする爲めに彼の仲間一同を處分せねばならん』と、大變な勢

教員側では、『連帶でその子の家へ行つて謝罪し、若し其れで肯かなくなつたら進退伺ひを出すより外はない』と、心細い返事をする。

其處で僕は指し出がましいがと斷つて斯う開陳した。

『彼の生徒は死んだら死んだ時として協議すればい／＼ちやありませんか、今現に學校へ出てピン／＼跳ねてゐるんだから些ツとも構はない、若し怪我でもしてゐると云ふならイヤ知らず、校長さん始めどなたも皆氣が小さ過ぎる、一切は僕に任して下さい、萬事解決しますから』と、己れは其の子供の家へ行つて、

『いやア子供ツて仕方のないもんですね、全く煮ても焼いても手に負へませんや、時にお宅の坊ちゃんはお強いですね、外の子供だと

「べんで往生安樂でしたに！一體日頃何麼物を喰べさしていらつしやるんですか」

なんと好案だらう、

『いゝえ別に之といふ……』

此の返事には少々見當が外れたが、

「ハ、ア、其れでは猶更のこと天稟ですなえ、イヤ何うも好いお子さんをお持ちに成つたものです、お楽しみですなア」

と、素敵滅法チンチクリンに感心すると、

『いゝえ、何う致しまして、御蔭さまで』

御蔭さまで？ めめたッ、

「及ばすながら學校としては全力を注いで教育申しませう、御安心下さい。日曜なんか勝手に遊びに出さない様親として御注意を願はないと我れ〜一同が迷惑此の上もない……」

と、却つて逆捻を喰はすと、

『色々先生さまに御心配かけまして』

と、平蜘蛛の如く謝まらし、揚々として引上げて、右口上すると、

『あゝ之で僕等は助かつた！一生涯君の恩は忘れないよ！』

恩は忘れて呉れてもいゝから、栗饅頭の二箱でも持つて来てくれたまへ。

◎赤んぼのへー

此の己れが中學時代には停學の二度も喰ひおまけにストライキの張本人で諭旨退學も危く喰ひかけ、時の受持教諭に『以後決して必ず乾度』と空涙流してごうやら頼む拜むで通學の出来るようにして貰つたり、又一年から五年まで續けざまに行狀點が丁であつたと知つたなら、よもや今の校長は僕を此村の先生にしてくれなかつたであらう。僕の差出した履歷書を大體信じたが悪い。誰れが此の狡猾な世の中に賞罰の場所へ『賞なし、罰あり停學二回、謹慎三回』と書く大馬鹿者がゐるもんか、僕は慥か『罰なし、賞あり柔道精勤賞、寒稽古皆勤賞』と無茶に皆勤賞を振り廻はして履歷書を出したつけ。

その僕だ、それが先生だ。一口云へば二口目に『此の先生を見做ひたまへ』と出る。『先生は貴方方の模範であります』とフンゾリ返つてゐる。此麼先生を模範にしたら最後、お前達の前途も大概知れ切つてゐる。

ストライキの張本人だからとて別に僕とて理由のない事はしない積り、話は斯うだ。

僕等の中學の校長ツて奴それはく口喧ましい、やれベースポールは放課後二時間以上は罷り相成らぬの、やれズボンの幅廣いのが不可ないの、ダートルを着けなければ校門は潜らせないの、夜は七時以後外出してはならぬの、遊びに出る時も用事の時も袴をつける

のと下らぬことに干渉する。或日吉仲と云ふ生徒がホンの五六間手近の湯屋へ行く途中を見附けられ、規則に反いたとあつて謹慎七日の處罰、これが抑々ストライキの最大原因をなしたものであつて、皆座その不法を鳴らさぬはなかつた。

遂に爆發の時到了！ 丁度その頃校長の宅に寄留してゐた生徒が一人あつた、熊田と云うてそれはニヤケた氣の喰はぬ奴、常に校長の犬とハチかれてゐた。校長は修身を受持つてゐた。此の次が愈、その試験があると云ふ休憩時間に、一同は「これが出るだらう」それは問題になるまい」など、大騒ぎしてゐる時、丸山がアタフタ駆付けて来て「諸君、熊田が之を落したよ」と持つて來たのを見ると

試験問題らしい。そこで勉強そつち退けて一同協議を始めて、若し之と同じ問題が出たなら決して書かぬこと、書いた奴は鐵拳制裁放課後一同は桎の蔭に集まること、斯う定めた。

鐘が鳴つた、着席した、校長は問題を黒板に書いた、見ると熊田の落したのと些つとも違はない。僕等は黙つて下を俯て一生懸命書いている様な風をして、その癡惡戯書ばかりしてゐた、そして時間の來るのを待つてゐた。ガーン、ガーン、と再び放課を知らず鐘の音にどんなに皆は胸を躍らしたらう。我れ先にとバタ／＼一枚の白紙を突き出した。校長の顔色は見る／＼變つた、周章て、一同を止めようとしたが遅い。

木蔭に皆は約束を履行して集まつた、僕は立つた。

『諸君、苟も一校の長とあるべきものが、試験問題を漏洩して恬然として恥ぢないとは何たる人格の下劣なることであらう。斯かる校長を戴いてまで我々は潔よしと教へを受けることが出来ようか、諸君、諸君』と故意と僕は聲を震はし、『見よ我が光榮ある〇章校の歴史を、見よ我が燦然たる校旗の光を！』とグーツと泣聲に變り、『あゝ諸君、諸君、歴史は穢されたるぞ、校旗は曇りたるぞ』此の時の助けか眼の中へ埃りが這入つたので之れ幸ひと摩つて見せると一同感激し、奮激し、且つ泣き且つ躍り、忽ちにして『校長排斥』とライキとなつた。

市民の仲裁も物かは、素志貫徹せずんばと破竹の勢、とう／＼校長は轉任、熊田は停學、僕は『濫りに良生徒を煽動し、校規を亂したるに依つての』文句附きで論旨退學の所、陳謝萬遍、辛くも停學一ヶ月で済んだが、若しあの時退學の情けない目にあつてゐたとしたら、今時分は『ひとつとせ』と銅鑼聲上げて大道の陋し者になつてゐたかも知れない。

停學に成つたのは煙草を二度續けざまに見附けられたからだ、始めは敷島を取出し、マッチで火を點けかけた時なんだ。ふかしたんでないのに呑んだと同じ罪名を着せられて、謹慎一週間、ほんとも少し早く隣りにゐた奴が『來たぞ狐が、オイッ』と逸早く知らせ

て呉れたら己れは知らん顔の半兵衛と澄まして「仰げば高き我が校の……」と校歌を唱つて胡麻かす筈だつたのに！

二度目の時は丁度冬だつた、雪がチラ／＼と外に降つてゐた。休憩時間中、己れは滅法寒さを感じたので、控所に下げてある外套の中に埋まつてフワリ／＼と心よい煙を吹き出して居ると、

「誰れだ、隠れて煙草を呑んでゐるのは？」

と、云ひながら外套を引張るから？」

「しッ、狐に見附かると大變なんだから」

と、己れは確つかり掴んで離さぬのを無理に「オイッ」と怒鳴つて外套を引たぐるから、

「亂暴するな……」

と、云ひつゝ、ヒョッと顔を見ると、呀ッこれこそ本物の狐先生！

「お前は小田だナ、又煙草を呑んでたナ！」

「いゝえ、決して……」

申譯の下から白い煙がフーフー鼻からも口からも。

「それ見ろ、出てるぢやないか」

「これは、そ、その寒いのでその息が凍るもんですから」

「ば、莫迦ッ」

と、教員室へ引張り込まれ、重ね重ね改心の様も見えぬからとあつて、停學十日、おまけに親まで呼び寄せるとあつたので己れは之れ

大變と、鼻をシク／＼音さして『こればかりは勘忍して』と、掌にドツサリ唾を付けては眼元へ大輸出を開始し、此の通りツてな哀れつばく見せたので、『勘辨の出来ぬ奴だけど……』と、狐先生ともあらう者がウマ／＼と己れの畏に罹つた。赤んべのへー。

◎唇を紫色

『高砂やアアア此の浦風に帆を上げてエエエハーオーツボン』と、己れは當直の徒然慰みに一人で親不孝聲をしぼり、机を鼓と定めて怒鳴るわ叩くわ、
『先生、先生さま』

『月もろ共にイ出でしほのオ』
オヤ誰れだか來たらしい。ハーオーツボンと僕は頬べたを脹らしながら、机の代はりに叩いて居る。
『先生さま佐内でげすへイ』
『オー佐内か、ま這入れ』と、六疊の室へ案内し、
『よく來たね、どうだ今年は豊年かね』
『駄目でがす、米が安いので俺等手の附けようが無えだ……時に先生様、此のハガキを一寸讀んでおくんせえ、己らア字が讀めねえでゴホン、ゴホン』
と、力の抜けた咳をする、オヤ肺病ぢやないか知ら、

「君、モ少し退りたまへ」

「茲までいがかすか」

と、大分離れてくれたので、稍安堵すると、

「先生さま、己らア咽喉が乾いたで一杯頂戴すべえオホン、オホン」と、大事の九谷の茶椀に湯をついで吞まうとするので、己れは慌てて、

「君、待ちたまへ、チヨイと待ちたまへ」と、止めると、

「いゝや白湯で結構でさア、茶なんか入れて下さらなくてもよようがすでさア」と、意味を取り異へて又しても口を當てようとするから、

「君、待つて、待つて、それには毒薬が入つてゐるんだよ」

「ヒエー毒薬」

「ウン、だから己れが別に茶椀を取つて来てやるから一寸待つてゐたまへよ、いゝか其處にある茶椀は皆麼危いんだよ」

と、ウンと念を押し、日頃己れと稍もすれば衝突する浦邊の奴の茶椀が教員室の彼奴の机の上にあつたのを取り來り、

「君、之で吞みたまへ、ごつさり彼處へも此處へも口を附けて大に遣りたまへ」

「有難うごんす」と、幾杯となく傾け、

「もう澤山頂きましたで、ゴホンゴホン」

「早や済んだのか、それぢや君その茶碗を持つて立上つてくれ、そして己れに従いて来るんだよ」と、再び浦邊の平生坐る席へ案内し、「茶碗を俯伏せにして其處に置きたまへ、ウムさうだ、さうだ」と、又戻る。浦邊も己れと仲善くさへして居ればあゝ云ふ大きな悪戯もしないのだに……。

「どれ、ハガキを見せ給へ」

「是でがんす」

「ごーれ」

と、今し手に取らうとして、ハツと氣附き、

「其の儘でいゝよ、逆の字を讀むのは己れの得意だから」

其麼得意があるもんか！

「えゝと、何だ、拜啓陳れば時下益々順調と相成り小生幸ひに無事消光罷り在り候間、憚りながら御安心下され度、御父上様も御壯健の事と遙かに慶賀し奉候」

ところが御壯健所の呑氣を云つて居られないのだ、そら又咳した。『扱て今月は本年の學期代りに依つて何かと本を買はねばならず、例へばキヤラクターとかアワーカントリとか、その外帽子も服も最早や全く古び候故、序でに新調いたしたく候間何卒金百圓此のハガキ着次第御送附下され度伏して願上候』と、細かく萬年筆で書いてある。

「どうだ解つたかえ？」

「先日も五十圓ばかり送つたのでさア」

「フーン、何處の學校へ行つてるんだ？」

「東京の〇〇中學で」

「どうもコレヤ皆麼拵らえ事だ、お家の息子は放蕩もんだぜ」

「其麼事ねえだ、夏故郷へ歸つて來ても書物と手紙ばかり書いてゐ

て温順しいだア」

「それが親馬鹿の阿呆鳥の大のろまの……其麼變な顔するなり。お前の息子はお前さんが額に汗した得た金を活動よし芝居よしと學校そつち退けにしてゐるんだ、金送れ金送れに碌な奴はゐない、キアツ

クターとかアワロカントリーとか英語さへ並べたら父が眞實と思ふだらうと息子が企らんだ業だ、情けない息子を持つたものだ」

「ちやけど東京へ出なくちや豪いもんに成れぬと云ふもんちやから」

「僞だ、親が毎日田圃へ出てセッセと働いてる時、息子は西洋料理と云ふて先祖の精進の日にも頓着なしに牛や豚や鶏ばかり喰つてゐるんだよ、そして異人の眞似ばかりして喜んでゐるんだぜ、佛の有難さを忘れて『神は愛なりと』耶蘇を信じたりする憎い奴、昔しなら一刀兩斷に抜く手も見せず……ア君は百姓だから刀はないんだナア」

先刻から唇を紫色に變へて聞いてゐた親父はブル／＼して、
 『おのれ佐郎吉奴、……先生、己らア直ぐ電報打つて歸へすべえ、
 文句作つてくんねえ』

『それがいゝ、よしきた』

と、硯を傍へ寄せスラ／＼と書いたのが、

『セイヨウリヨウリヨクウナ、スグカヘレ』

◎大數學家ても

犬にヒョククリ出逢つた、之で思出した事がある。

中學にゐた頃、一人の非常に犬を恐がる倉田と云ふ先生があつ

た、犬の顔さへ見ればブル／＼する、

屹度何處かで犬に噛まれたので、其以來恐犬病に罹つたのかも知れない。此廢人が戦争に出たら犬さへケシかければ大丈夫だと僕は思ふ、彼廢に大きな身體をしてゐる癖に存外膽ツ玉の小さい先生だ。

此の先生恐ろしく勤勉家で教室へ入るか入らないに (X+Y) = X+Y と始めるんだもの、ガツカリして仕舞ふ、そして時間が來ても猶夢中になつて頭から湯氣を出して續けるんだもの、お蔭で此先生の時は休憩時間が二分か三分しかありやしない、だから鐘が鳴ると彼方でも此方でもハークションと出もしない咳をして退場を促すのだが、其の度に『肺病患者なんか出て行き給へ』だもの、手の附けようがない、あれで若し試験後皆廢に對して十點宛増してく

れる雅量が無かつたら屹度ストライキを喰はされてゐるだらう。
 或日、僕は僕の家に向つてあるボチが登校の時どうした拍子だつたか附隨して来た。まゝよと教室へ連れ込んで机の下へ入れ、足で外へ出ない様に抑へてゐた。一定の「M」の説明が済んだ、宿題がボンボン當てられた。

其のうち己れに順番が見舞つた、此の前は「出来ません」と首を下げたから今度は厭でも應でも出壇して少しでも書かなければ學期試験に危ない、幸ひ時間もモウ僅かだから黒板の前で考へてる真似してゐたら其の裡ガン／＼鳴るだらうと、ヌツクと立上がつて机から離れようとした時、先刻から足で抑へ付けられてゐた犬は身體に

ゆるみを得たものだから突然飛び出した。あッ大變だと抑へ止めようとしたがモウ遅い、ノ／＼と教壇目がけて進んだ、先生はまだ知らない、熱心に本を見詰めてゐた。

ウーワアン!

ワアン!!

先生はビョーンと飛上がつた、その驚駭の顔と云つたら! ヒエーとばかり後ずさりした。

そして聲もオロロに、

「諸、諸君、此の犬を、そ、そ、外へ、誰れか、……………」
 ウーワアンワン、ワン、ワン。

「しッ、しッ」

と犬が飛び廻る毎に、後ずさりしながら、

「早く、諸君、だ、出して」

と、室外を指さすが、皆麼はどうしていゝか分らないから、面白
いので、調子に乗つて「ウス〜」とやらかすので、犬もテツキリ
此奴正直銘の患者に違ひないと思ふたか一段と猛り狂ふて噛み附
かむ勢ひでウオーと牙を怒らして今しも飛び掛らむとするので
「諸君、助けると思つて、しッ、しッ、しッ、諸君」と、とう〜泣き聲
に移り變つた。

犬は直ぐ様己れが連れ戻つたが、先生その後「僕の儘にならぬこ

とが世に二つある、一つは洋行の出来ぬこと、一つは犬の絶へぬこ
とだと清盛式に述べた言葉に徴して見てもあの時の恐怖さ加減
が了解る。

しッしッとあの時の腰付つたら！

あれでX+Y方面では校中一の数学家だからなア、

若し(X+Y)=dogと云ふ答へが出たりするもんなら先生吃驚戦
て早速辭職して仕舞うに違ひない!?

◎消化の研究

我輩喰ふことに掛けては大の豪傑、菓子もよし果物も大賛成だが
此處へ来てから未だ柿と栗とは喰はないから欲しくつて堪らぬ、買

へばいゝんだが、買ふよりは云づ……。

平常の通り授業に出た。

「皆さん、今日は植物の御話しを致しませう、……大抵の植物は春に芽を出し花を咲き、秋に成ると實を結びます、其の實の中に種子があるが、種にも色々あります。先づ此頃よく見る柿を割つて御覧なさい、種がありませんか？ 其の種を更に切つて御覧なさい胚と云ふものを見出します、解りましたか」

皆麼は胚といふものがあるとか無いとか云つて騒いでゐる。

「皆さん、其麼に皆さんが議論したつて仕方がないから明日各自に家から成る可く大きな柿を二つ宛持つてゐらつしやい、濫い方だと



一寸此方に差支へあるからね、甘い柿に限るよ、先生は其れを切つて諸君に詳しく説明して上げませう』

翌日に成ると、總生徒五十何人が御叮嚀にも我輩の仰せを聞いて持参した總數大小併せて百幾つ！あるは〜。

其の中から小さいので、喰ても味のなさそうなのを二つ撰り出し、ナイフで見事に立ち割つて種を取出した。

『此の中に胚があるのです』

と、云つて又切らむとする時、何うした拍子だつたか指の尖端を二分許り切つた、血がダラ〜流れる、我輩其廢事に頓着するもんかい、立派に横断して、最も前に坐つてゐる生徒に、



「此れが胚だ。見たら次席へ」

と、渡して置いて、自分は豫ねてから持つてゐた風呂敷に盛て、後全部の柿を集め、

「皆さん、此の柿は他の先生達と又研究するのにしますから」と、云ひ渡すと、一人の生徒が立上がつて、

「先生、先生、私の家に栗が澤山成熟つてますから持つて來ても宜しう御座いますか」

「栗か？さうかい、ちや早速明日持つて來給へ、他の先生達と栗も研究して見ますから」

「ハイ」と、其の生徒が坐わるや否や全生徒の半分程が皆廢、

「私の家にも有りますから私も持つて來ます」

と、我れも我れもと手を擧げる、

「宜しい、皆さんが先生の研究事業を助けると云ふことは誠に心掛けて、今後とも其の心掛だけは忘れてはなりませんよ、他の學校の生徒の真似の出來ないことです」

と、賞め立て、遣ると、涼しい顔して喜んでゐる。柿は後で同人等と一緒に腹の消化作用を研究する爲めに喰つたわ、喰つたわ。

◎松露取れツ

或日のことだ、莫迦に天氣がよかつたので授業する氣が出ない、幸ひ三時間目が體操の時間だつたのを好機とし、我輩、日清戰爭當

時の古銃を引張り出し、肩に擔いで義勇兵の扮装、運動場に受持の生徒を集め、

「今から家へ行つて熊手を持つて来い」

と、命令すると、木葉の散るが如く我れ後れじと各自に家へ取りに行く、家の近い奴は直ぐ戻つて来る、遠い奴だつて、十分も経たぬ内に馳せ集まる。

「其の熊手は鐵砲だ、擔げへオイッ」

百姓の子丈けあつて擔ぐ事は旨い、

「右向けオイッ、駈け走ッ」

と、我輩は列の最先に成つて程近い海岸へトットト走る、生徒

は兵隊に成つた氣で喜んでゐやがる。

廳で海岸へ来る。

「止まれッ、一列に並べッ」

仰せの通りになる。

「番號ッ」

「一……二……三……四」

「よしッ、今から其の熊手で松露取れッ、澤山取つたものは豪いんだぞ」

負けて堪るものかと、妙な所へ力瘤を入れて掘ること掘ること。時分はよしと、

「集まれッ」と、號令する、

「皆麼居るかッ——居るね——其の松露を皆此處へ集めッ」

と、僕は大きな風呂敷を出すと、我れも我れもと其の中へ入れる、やれ俺のはお前のよりは澤山、やれお前のは俺のより少ないと澤山取つたのを大に誇りとしてワイ／＼云つてる、

「静かにッ、此の松露は君等入用まいナ」

「入りません／＼」

と、生徒は口々に云ふ、『そうだらう、君等は何時も喰つて居るから入用まい、それでは此の先生が貰つて行くぞ、鐵砲擔へッ、駈け足ッ』

學校へ着くと、校長は又かと云ふ顔付で、

「小田君」と、呼ぶ、

「何んですか」と傍へ行くと、

「君困るね、其麼勝手に生徒を外へ連れ出して貰つて萬一當局に聞へたりすると面白くないよ」

「それはどうも。然し生徒にも聊か軍事思想を持たして置かねば、鐵砲一つ擔げないとあると一等國の面目に係はりますから」

「然しそれは時節があるでせう？」

「時節ですか、昨今程いゝ時節はありません、天氣はよし、風は霽るし」

「……………大體君の號令の聲が餘り大き過ぎる、君の體操の時間中何の教室も喧ましくツて勉強が出来ぬ、生徒の心が全きり上の空で心の中で體操ばかりしてゐて困る、以後もう少し聲を小さくして呉れ給へ」

「はい、解りました、」

と、神妙に御辭儀して、翌日から體操の時間となると、遺言でもする様な聲で、

「みぎむげ」

生徒は己れが風邪を引いて咽喉を痛めたか、水銀でも呑んで聲が出なくなつたのかと思ふてゐる。

己れは校長の命令を守るに斯くの如く忠實だよ。

◎鐵拳うなる

此の日の午後又椿事が起つた、前以つて一言一寸述べるが、田舎の先生ほど村長助役を恐がつてゐる者はない、従つて其息子なんぞには少からず手古摺つてる、恰も縣立學校の校長が知事殿の息子に敬遠主義を採ると同じである、僕の學校の校長も此の例に洩れぬ方で僕の性格として其れが全く殘念で堪らぬ。彼等の息子はいゝ幸と思つて勝手な事を仕出かす、何時か機會があつたら凝らして遣らうと豫ねてから思ふてた矢先、恰もよし村長田邊喜兵衛の息子喜太郎が、僕のガラスの與吉が面白そうにゴム玉を持つて遊んでる傍へ行

つて突然それを引繰り、おまけに頭に三ツ四ツ拳骨を喰せて笑つてのやがる、校長初め見てゐたへボ教員連中何んとも云はぬ、最前から生意氣な奴と眺めてた僕は擲られた者が僕のクラスだから猶更都合がよかつたので裸足の儘飛び出して喜太郎の奴を引捕へボカッくど力に任せて擲り付け、

「僕の級の奴を何するんだ、イヤ村長の息子だ、息子だと威張るな、他の先生は知らぬが己れは斯うして遣る」

と、覺えの柔道でウンと許り投げ付け、續いて鐵拳で思ふ存分ボカリと所嫌はず擲り飛ばし、

「さア之で宜いから家へ行つて親父に小田先生が此處酷い目に逢し

たと云つて來い、屹度云ふんだぞ」

と、家へ追ひ遣り、氣持をスツとさせて教員室に這入らうとするど、最前から見てゐた一群の悪太郎喜太郎の肩を持つ積りで云ふんだらうが後から變な口調で僕を侮辱する、憤怒に憤怒を重ねた僕はえ、儘よとグルリと踵をめぐらして、

「何をツ、貴様等其處へ一列に集まれッ集まらぬかッ、逃げたりすると落第させるぞ、集まれ」と、破鐘の如き聲を出して、怒鳴り付けると、落第させられるが恐さにモツくして何うやら列を爲した。

「貴様等、先生を何んと思ふてるッ、生徒の分際として生意氣だッ」

と、一人一人の頬をボカ〜。

『さア之でい、から歸れツ、家で小言を云つたら何時でも小田先生は相手に爲つて遣ると云へ、之れから少しでもツイ〜嘸し立てると又斯の通りだツ』

と、白睨付けると、縮み上がつてスゴ〜歸つて行く。教員も校長も梅干を噛んでゐる様な顔をして黙つてゐる。

翌日喜太郎の父が學校へ僕に面會に來た、校長は眞青になつて結局何うなるかと大變心配してゐる。

僕は愈々事が面白う成つた哩と獨り喜んで逢つて見ると、大將の云ふには彼の子は家にゐても手に合はぬ奴で平生から困つて居まし

たのに、昨日學校で先生からウンと意地目られたもんですから餘程怖れてます、親の手にも餘る子ですから之れからも何卒叱り付けて下さい、本人の爲め孰れ丈け幸福か知れませんが、ペコ〜僕に禮を云つて歸つて行つた、何が幸になるか解りやしない、己れが宿へ歸へつたら大きなお萩餅をシコタマ持つて來て、『御恩返しに參りました』と村長君餘程嬉しかったらしい。己れは此處いゝ仕事は又とはあるまいと思ふた、他人の頭をゴツン〜してお萩餅が頂戴出來るんだもの、待てよ、又隙があつたら喜太郎を故意と擲り飛ばして遣らう、今度は安倍川餅がいゝなア！

◎世が世ならば

昔し大岡越前守が新井白石に試験せられた、その試験と云ふのはソラ百から一を減じたら幾つになるてんだ。他の奴等は即座に九十と答へたけど越前守は何卒算盤を貸して下さいと云つて、叮嚀に百から一減いてと球を弾いて九十九ですと答へた、此奴頭の緻密な男念に念の入つた男だと白石に見込まれて遂にあれほどに出世したことは誰でも知つてる。

僕は試みに此の話を適用して見た。すると我れ先きに手を上げて答へようとする。殆んど皆度がそうだ。越前守になるような人物が一人も存在せぬらしい。その裡に前列の生徒の圖體の大きい奴が「先生、手帖で計算しても宜しう御座いますか」と、訊いてから、ウム

有望だぞと『よし』と快諾すると、その子供矢鱈に書いたり消したり、消したり書いたりして漸つこのことで答九十九と出た。之を未來の名判官ぞかしと、ヂツと熟視すると、此奴は何日も毎年算術で必ず三度の御飯を喰べる様に定まり切つて落第する仁三だ。徳川時代に仁三若し生れてあつたなれば白石必ず仁三を判官にしたかも知れない。仁三は界限名代の鈍物、だから屹度人殺しが御褒美を頂戴したり、天一坊の野心を見抜かれず其の儘あの悪僧を第何代將軍と崇め奉らしたかも知れぬ。

大正の御代若し白石の如きあらば俊才常に不遇を啣ち、低脳兒獨り宰相たり大臣たるであらう。

仁三や仁三、お前はオギヤアの時期が遅かつた、世が世ならば高名天下を風靡したんだらうになア。今年もお前は其の調子ぢや又落第するかも知れないよ。仁三や仁三。お前はもう何事も諦めたがよかんべよ。

◎諸君は馬鹿だ

村の青年會からは是非僕に出席して何か話して呉れるとの御注文、青年會！知れたものだ、よしウンとはらを吹き立て、吹き飛ばして遣らうと早速快諾を與へて遣つた。

扱て當日に成つて、會場に行つて見て驚いた！七八十人が關の山だと思ふて來たのに何處から何う集まつたものか知らぬがギツシリ

一杯で身動きもならぬ。來賓は僕が一等の正賓だらうと思ひの外、郡長も居れば郡視學も居る、村長も居れば校長も來てゐる。待てよ此の様子では今日の腹案の演題が不穩當かも知れぬて、止めようか知ら。馬鹿ッ男だ、彼奴等の意に觸れた所が高が免職さへ覺悟すればい。

肥桶臭い男が開會の辭を述べる、平凡だ。次に現はれたのは名譽會員古田常松「青年會の發展」と題して、やれ風俗を改良せにやらぬだの、協力一致事を爲し親睦を計らうだのと平凡で了解り切つたことを天晴れ我れこそは雄辯家で御座る、と云つた様な面構へ！啖でも吐き付けるぞ。

扱て其の次に出現ましうたのは誰れだらう！云はずも知れた俺様だ。悠然として演壇に足を運び、一偶から一偶まで軽く見遣つて咳一番、

『満堂の諸君』

と破鐘の如き聲で怒鳴る様に吐き、

『余輩は前辯士の平凡なる演説に拍手喝采せる諸君は我輩の『諸君は馬鹿だ』の奇抜なる演題に對して、より大なる喝采あるを信じて疑はざる者なり』

『俺つち等馬鹿ぢや無いぞッ』

と、喚く者がある、

『云ふを止めよ、諸君は馬鹿也、余輩は諄々として諸君の馬鹿なる點を一々列擧して然る後批評を待たむと欲す』
と、コップに水を入れてグイと呑み

『諸君、青年會員の一人俗稱ガメなる者五六日前太兵衛親爺の娘ふり子と隣村へ駈落せしことは御存じなる可し、然るに諸君は平然として知らぬ顔の半兵衛とは何事なるぞ、本會は創立以來既に五ヶ年を経過せりと聞けり、然るに諸君は單に協力とか親睦とかを口に亂用して更に實行をせず、馬鹿に非ずして何ぞや、何故諸君はガメ及びふり子を隣村より連れ戻りて大なる訓戒を與へざるぞ、一刻も早く彼等をして歸宅せしめすば我が村の名聲全く地に墜ちむ、他村

の者等より彼れ見よ栗津村より駈落云々と次第々々に噂の高まらむには世間の本村に對する不評火を見るより明也、眞實村の名聲を維持せむと欲せば何すれぞ彼等を歸宅せしめざる、妄に會のみ開きて郡長を招待し、村長を招きて菓子を喰ひ酒を呑みて喜色ある諸君は抑々馬鹿に非ずして何ぞや」

満堂寂として聲なし、怪燭虹の如し、

◎之は堪らぬ

宮田作兵衛と云ふは村で一番の金持だから學校で圖書室を拵へるだの、同窓會を開くだのと旨々此の作兵衛を欺ますと、直ぐ

「金拾圓也」

「右同窓會ニ寄附ス」

どくる、村の青年會の者共何時も之れを黙つて居たが、遂に堪らなく成つたと見えて、やれ俺等の方へもど寄附を強請ひ、唯では強請まない、顧問にするの名譽會員にするのは百姓としては分に過ぎた上出來の云分、一體此慶親父に成ると金があるものだから金に不足は無代りに何かの肩書が欲しくて堪ら無い、肩書さへあればホク／＼顔してゐるだから縣からの招集に應じて出應する際の名刺を見給へ

栗津村尋常小學校同窓會長

青年會顧問

老八保護會幹事

宮田作兵衛

とある、豪い者ぢや、豪い者ぢや。

此の宮田作兵衛の息子に作左衛門と云ふがある、名前を聞くと親父臭くてゾツとするが素敵な美少年だ、妻の子である故でもあらう女にして見たい程だ僕は非常に仲が善い——變な咳するね——。

或日僕は生徒の仲へ混つて隠れン坊をした事がある、皆麼は先生も一緒に遊んでくれると大喜び、僕が何處へ隠れたらう何處へ隠れたらうと血眼に成つて探しに来る、閉口せざるを得ない、どうく捉まへられた。

さア先生が鬼だと鼻垂らし共ドツと逃げ失せて忽ち見えなくなる。

此の時だッ、僕はヂツと作左衛門の行方を見守つて居たが、頓て便所の方面へ隠れたのが、微に了解つたから、ウム必つと捕まへて見せると、トツ／＼走つて便所に来、臭い思ひをして一々開けて見たが居ない、不思議だぞと最後の一つに手を掛けたが何うしても開かない、さてはツと喜色満面、高が子供一人の力、幾程支へて居ても知れたものだぞ、グツと両手に力を入れて開けた。

作左衛門？ 呀ッ、女教員鹿島芳枝！ 之は之はと許り花の芳枝どの真赤な顔をして僕を白睨み附けた、己れは進退絶命！ 何處か穴があつたらと探す迄も無く澤山あるが、真逆此處臭い穴へ逃げ込む譯には行くまい、エ、ッ斯うなりや仕方が無いと、

「許して呉れ給へ、君がウン／＼遣つてるとは些つとも知ら無かつたのでツイ／＼その」

と、頭掻き掻き辯解すると、

「失禮ぢや御座ませんか男の癖に！」

と、恐ろしい権幕、

「實は其の……」

「存じません！」

と、噛み附く様な勢、猛烈當たる可からず、流石の僕も何う云へば宜いやら途方に暮れて居る所へ、折が折とて仕方が無いもの、校長が小用を催はしたので遣つて來て此の體を見、



「小田君何うしたんですか」
 と、不審な顔をして僕を眺める、實は斯うくくと有の儘説明して居る最中へ、一體鬼の先生が何うしたんだらうと彼方からもヒョクク、此方からもヒョクク生徒が現はれて、芳枝の氣極の悪い顔と、僕の氣の毒そうにしてる顔と、校長の怪訝の顔とを見較べて密々語り合つて居たが、頓てドツと鯨波の聲を擧げて、
 『鹿島先生と小田先生と臭い、臭い』
 と、我れ先きにと逃げ失せる、エ、ッ畜生ッ臭い所で臭い噂をされて堪まつたものかい。

◎蜂よ蜂よ



中學校へ入學して間もない一年の時だった、體操の先生で富澤と云ふ人があつた、そりや嚴格な方で、氣を附けの時ビクツと動いたりするもンなら横面張り飛ばされたものであつた。

「氣を附けの際身體を動かした者は精神の腐つた者だ、第二國民の資格がないッ」

と、眼の玉がハチキ出る様な大音聲で聞かされたものだ。

或日普通の通りゲートル履いて運動場に整列してゐた時、一疋の大きな蜂が飛んで來た。僕は後列だったから、前から見て判らぬ程度で軽く首を動かしたので、蜂は前別にゐた深見君の所へ飛んで行つて、額の所を之れでもかと計り突き螫した。深見君は自若として

動かなかつた。蜂は有難いぞと今度は臉の上から「一寸螫してもいゝかえ」とも案内せず更に螫し込んだ、それでもヂツと堪えてゐた。それを富澤先生に見附かつた。先生は深見君を引つ張り出し、「皆麼見ろ、深見は只今蜂に螫されてゐたのにも係はらず泰然として己れの教へを守つて動かなかつた、模範だ、此の心掛けを手本にしろ。」

と云つて體操の點を即座に百點くれると斷言された。

僕は其の時惜しい事をしたと思ふた、蜂が來た時避けなかつたら其の百點は僕の物になつたんだに。但し深見君の様に見る／＼裡に人違ひかと思はれる程脹れない範圍内に螫して貫はなくちや御免

だ。
蜂よ、蜂よ、己れにも止まれ、螫すな螫すな、ちよつと丈け止まれ。
れ。

聽て授業済みの鐘が鳴つた、その時又僕等は不動の姿勢の下に何事か聽かされてゐた。先生は仲々「別れッ解散」を命ぜられない。一分二分三分と休憩時間が刻まれて行くので、僕はモドかしがり、思はず共に並んでゐた安達と云ふ男に、

「オイ邪見婆もう濟んだになア」

と呟やいた。邪見婆とは安達ヶ原の邪見婆と云ふ事から採つた異名である。婆さんで無いのに安達は「邪見婆ッ」と呼ぶと何時でも「オ

」と返事した。

邪見婆は何んとも返事しなかつた、突然今まで教訓を與へてゐた先生の音調がガラリと變はり、満面朱を灑いで怒氣荒々しく、

「今喋べつた者は誰れかッ、茲へ出ろ」

僕は黙つて居ればその裡に「注意せんければ不可ん、アーン？」で濟むことゝ思ふて返事しないで居ると、

「誰れかッ、出ろ、出ないと何時までも斯うして置く、明日までも明後日までも放擲つておく、出ると云つたら出ろ」

僕は他人に迷惑を掛けるのは宜しくないと思ひ、且つ又正直に白状したら却つて早く許されるだらうと思ふたので、ツカ／＼と前列

を割つて歩調正しく一問程進み出で、

先生は活潑が好きだからと大きな鼓膜が破れる様な聲で、不動の姿勢を取つて、

「只今喋べつたのは私でありませう」

「ナニお前か、何んと云ふた？」

「ハアイ安達ヶ原の邪見婆と云ひました」

「不動の姿勢の時喋べれつと己れが云つたか？」

「ハアイ仰しやらんであります」

「どにかく後で教員室へ来いッ」

と、張り裂く様な眼で僕を睨み付け、漸つと解散。

あとの事は僕として餘り云ひたく無い、だつて君、頬を脹られて、突き飛ばされて、加之に體操は落第點。書いてゐて少つとも面白かア無いんだもの。

己れは名譽回復の爲め大努力勉勵の必要を感じ、暇さへあると、
「蜂よ、蜂よ、己れにも止まれ」

◎希望の光

我輩は第一に生徒をして吾輩を尊敬せしめ様と柄にもない野心を抱いて一日斯う云つた。

「君等は後日何んになる積りかい？」

誰れも返事しない。

「直ぐ返事する者には、點を澤山遣るぞ」

と、云ふとさア先生々と手の上がること!! 我れ後れじと高く上げて吾輩の目に止まる光榮に有り附かうとする。

「一番、君の目的は？」

皆麼の羨望の下に一番はヌツクと立つて、

「坊主學校へ行きます、そして和尙になります」

「そうか、二番は？」

「私もさうです」

可笑しいぞ。

「三番は？」

「私も」

フーンなる程此奴等都の者と違つて、如何に宗教の發達した地方なりとは云へ、坊主になるのを無上の光榮として居やがるなア、無理はない彼等の頭にも坊主程豪い者はないと心得てゐる、夫れならば其れで一泡吹かして遣れ、

「ぢや中學校を受験る者は居ないか」

誰れも居ない、

「何故君等は中學校を受験ないんだね」

「柴野先生は中學校より坊主學校がいゝ、貫ひが澤山あると申され
ました。」

之れあるかなだ、之れだ、之れだ、尋常科の生徒には先生程有難いものは無いと均しく先生程感化を及ぼし易きは無い。彼等は先生を親の様に思うてるんだ、よし吾輩が其の思想を改革して遣らう。柴野は坊主學校を出た和尚さんの卵に過ぎないのだ。青年は死人を相手にする商賣は宜しく老人に譲つて、激濁たる活舞臺に奮闘する覺悟がなくちや人間の精神が死んで仕舞ふ、柴野は其麼に坊主を拵へて何うする積りだらう。日本は坊主の國ぢやないよ。我輩根本的に生徒の思想を打消して見せる。第二國民の養成如何は我等が雙肩にあるんだぞ。

『坊主學校を受験する者は馬鹿だッ』

と、突然怒鳴り附ける。

生徒はあッべら顔で僕を見詰める。

『考へて見い、坊主學校を卒業した所が高が和尚さんが關の山だ、何故中學校を受験ないんだウーン？ 日本は今豪い人達は皆中學校を卒業るんだぞ、知事でも大臣でもさうだ、だから若し立派な者に成りたいと思ふなら、中學校へ入學れ、東郷大將も中學校を出たんだ、ウーン？ 解つたか』

感心して聞いている。

『早い話が坊主學校を卒業出世した處が何に成る？ 中學校から高等學校大學校へと行つて聽て後後豪くなれば、ナポレオン見たいに』

出世する、だから決して坊主學校なんか行くことは罷りならぬ。未
來の東郷大將に成りたいと思ふものは中學校へ入學れッ」

新參先生氣焰虹の如し、生徒はハーンと許りグウとも云はぬ。

「そんなら先生は何故小學校の先生に成つたんですか？」

「ウン先生か、先生は兒童研究の爲め、假りに……假りにちや解る
まい、一時だ、一時先生をするのだ、もう直ぐ止める、そして來年
兵學校の試験を受験て及第して三年経つと少尉、だん／＼上ぼつて
中將大將になるんだ、胸に勳章が一杯あるぞッ」

萬丈の大氣焰！

「さあ何うです諸君、中學校を受験る氣になりましたか」

生徒は希望の光りに満ちてゐる。それ見い。

「改めて訊く、中學校を受験る者は手を舉げッオイッ」

ヒヤアその舉ること云つたら！

◎ 俵藤太と己れの母

昔し俵藤太が平の將門を退治する前は二人とも敵でも味方でも無
かつた。或日將門は藤太を晝飯に招待した。食事最中將門は飯粒一
つ落したので大慌てに慌て、其の飯粒を拾ひ食つた。藤太はこれに
依つてハ、ン將門て奴は語るに足らず、與みするに足らずと見込み
を附けて仕舞つた。何故かと云ふと若し茲に假令へば關ヶ原の様な
大合戦があつたとする、味方の一部の僅かの軍勢が敵に敗られたと

する。スワ大變一大事とばかりこの方へ兵を繰り出す、此の間に敵の大軍がドツとばかり其の隙を覗つて押し寄せ、一舉に機先を制して味方の大敗北を招く。云はゞ大は小を省みずと云ふ大きな所が將門に無かつた、だから烟眼軍の如き藤太に早くも其の性格と膽力とを見透かされて仕舞つたのである。斯う云ふ話だけで將門も藤太も如何なる人物であるかと云ふことがアリくと窺知することが出来る。秦の始皇帝の歴史なんか幾程暗記しても暗記しても忘れたけど、此の兩人の事丈けは状態に封をした様に今でも頭にコビリ附いてゐる、だから己れは一度も飯粒を落したつて慌て、摘み上げなかつた。その度母から行儀が悪いと叱られたけれど、御母様は歴史を

御存じないから駄目だい、だから藤太若し此世にあらば僕の手を握つて豌豆豆の様な大粒な涙をポトン／＼して『君は確かに我が知己である』と喜び咽んでくれたであらうに。
今己れは親愛なる我が受持教室の生徒の晝飯を番してゐる。そして黙つて生徒の喰ひつ振りを見詰めてゐる、他人にチツと見られてゐる前では碌に物も喰はれないものだけに、どうしてあゝ平氣なんだらう、オヤ／＼平吉のあの大きな口の開け方と云つたら！郵便箱の様だ、誰れだ隣りのお菜を覗いてるのは？ 權助だな、側見しちや人相が悪くなるぞ。ヤア太兵衛め飯粒を落したぞ、慌て、拾つてゐらア、藤太が傍にゐないと思つて油断しちや不可ないや。平常

からベースボールの様に練習して置かないとイザと云ふ場合間合はないよ。

オヤ／＼兵助も太十郎も助左衛門も皆廢矢つ張り落としやがらア、うつちやつて置けばいゝのに、競争でもしてゐる様に、大急ぎで口の中へ入れて居る。僕の御母様に此處所を見せたら屹度これ御覽、お前の教へてゐる生徒でさへお前よりか行儀がいゝと言はれるだらうし、又藤太に見せたら將門の二代目だと思つて片ツ端から茸狩に行つた様に此れ等全生徒の細首をヨキスイテ仕舞ふだらう。あゝ我れ英雄たらむと欲すれば不幸と呼ばれ、幸たらむと欲すれば英雄たらず、一體全體どうすればいゝのだい。

◎先生は拙手

僕だつてよもや小學校の先生に成らうなんかと云ふ事は親のお腹に居た時でさへ露知らなかつたんぜ、だけごさ一高の入學試験には落第るわ、士官學校では勿ねられるわなご、士氣阻喪する事許り、萬止むを得ず、一時腰かけに村の先生と化け込んだので御座る。誠に返すくも萬止むを得ない次第だが之から或は何處に出世するかも知れない。今は只清い空気を吸うて、英氣を養つてゐるんだぞ。己れは入學試験の時は新井白石の様に勉強した。白石は勉強する際に時間の徒費を惜しんで火鉢で手を温の旁々豆をイリ、其れを噛み噛み本を讀んだ、己れも屹度あゝしたら頭も良くなるだらうと大

に期待して人並みに豆を搦んで焙つては噛み焙つては噛んだが、どの豆も生臭くて食へやしない、幾程焙つたつて生の儘だ、シテ見ると白石の手はイリ鍋見たいと耐火性に出來あがつてゐたんだ。若しさうで無かつたら白石は兎見たいに生豆ばかり噛んでゐたのに違ひないや、不養生だなア青山博士に見附かつたら屹度目玉をむかれて叱られもんだぞ。

『二兎を追ふものは一兎を得ず』と云ふ事があるが有りや嘘だ。何故ならば白石は喰ふことゝ讀むことを一緒にしてゐる。それなのに白石は學者として大成功した。格言も當にはなり申さず候では御座らぬか。

僕は生豆噛ちつた程大勉強したのに落第する、胃病になる、運動不足で顔色蒼白を呈する、一つも確なことはありやしない。歸着する所が小學校の先生様とはナインのこつた。い。

僕が最初此の學校へ來た當座は斯うだつた。

『私は小田と云ふ者です』

と、始めて羅馬の滅亡から再び救ひ出された様な薄汚ない學校の中で古色蒼然たる校長に逢つて挨拶した。

『兼々承つて居りました。今日か明日かと首を長うして待つてゐました。』

僕を飛行機か何かの様に思つてたらしい。柔道で八人も投げ飛ば

した中學校時代が此の時フト頭に浮んだ、それと比較して此の情けない有様は何うだと思ふたら、知らず、涙がポトン／＼した。校長は總ての先生に紹介した、見渡せば古木新木混合の體、生若い者も居れば白髯を撫した老人も居る、此の中へチヨツクラ吾輩が這入つたんだ、黒鐵の如き男が飛入りしたんで御座る。應て全生徒が控所に集まつた、吾輩は校長に従ふて這入ると、何様行儀の悪い子供だものワイ／＼云うて蛙の泣くが如しぢや。體操の先生が『氣を附け』と號令すると一時にバタリと鳴りが止む、すると校長は咳一番して壇上に立上り、そして軽く一禮して、『此度長岡先生の代りに小田と云ふ先生が此の學校にお出下さる事

になりました。』
皆一時に僕を見る、一寸赧くなる。
『小田先生は今年中學校を御卒業遊ばした秀才で諸君も此麼い、先生をお持ちになりましたのは實に幸福と云はねばなりません』
『〇〇〇〇〇〇、耳が痛い哩、と思ふと前より多く赧くなる。』
『皆さんも長岡先生の様に此の先生から教へを受けて決して不行儀なことや先生に反抗する様な事をしてはなりません』
之れまで厭と云ふ程反抗して來た僕には片腹いたい。甚だしく勝手手違ふ。
『只今御紹介致します』

と、僕の方を向いて一禮して壇を下りる、僕何んとか云はざる可からず、ツカ／＼と進み出で、

「僕は未だ御覽の通り子供です、之れから共々に勉強して遣つて行きませう」

と、眞面目に此の紹介式だけは云ひ退けた。

但し兎角云ひ退け得ざる不眞面目が續出ばかりしてゐる。

翌日小田先生は尋常五年生の鼻垂らし四十五人の受持ちと成つた、始めてチヨーク箱を持つて習字を教へに出た時、生徒は未だ怖ろしい先生だらうか、恐い先生だらうか解らないもんだから鳴りを静めて膝の上にチャンと手を置いて待つてゐる、僕が這入ると、權兵

衛、與左衛門の息子達スツト立つて恭々しげに禮をする。昨日までは親や先生の手合はなかつた此の己れも今日からは小田先生と崇めらるゝ身と成つたと思へば得意なもの、軽く見廻はして軽く答禮して遣る。

扱て愈々授業になるんだが、新參先生大に困ることがある。習字の手本の字を黒板に書かねばならぬ、所で彼奴等昨日校長が僕を秀才だと賞め立てゝあるものだから何麼に旨く僕が字を物するかと、僕の書かんとするのを穴の開く程見てゐる。こいつには一服した、一服したが嫌でも應でも書かねばならぬ、小田一生の大事と消しては書き書いては消し、漸つと書き上つたのが「忠孝、禮儀、恭儉、

忍耐』と云ふ只さへ六ヶ敷いの許り、それに黒板と云ふものはなか
く馴れなければ旨く書けるものぢやない、能筆の男でも此の前に
は一寸逡巡する、殊に悪筆を以つて名代の僕と來てるだらう、猿
の書いたのより拙いや。遠くから離れて眺める、左に寄つてるのも
あれば右に傾むいてるものもある、冷汗がポタリポタリと流れる、
生徒は互に顔を見合はしてコソコソ喋べる、フト誰かど、
『今の先生は字の拙ッべ』
『今も憚りさま。』

◎火事の膨脹

『皆さん、私は今日皆さんに非常な有益な御話を致します。耳の中

に塵埃が這入つてゐたら今のうちに掘ちくり出して置いて呉れ給へ
よ、さて満堂の諸君、コラ常吉、ナイフで何處をけづつてるんだ、
さて改めて満堂の諸君よ、諸君は何故鐵道のレールとレールとの間
が二寸も三寸もあいてゐるのか、その譯を御存じですか、知つてる
方は？』

手の舉らぬ所を見ると誰れも知らぬらしい。

『御存知ないんですか、御無理はありません。此の先生の様な賢か
つた者でさへ君等の様な時には知らなかつた位です、況んや諸君の
如き……あとは云はずに置きませう、レールとレールとの間を故意
と彼塵風にあけてあるのは熱の爲めであります、物體は總て熱を與

へると膨脹するものであります、たとへ鐵の様な堅い強いものでも致方もないです、ですから夏になると、知らず／＼の裡に伸びるのです、で若しあの間をあけて無かつたら、レールは源爲朝の弓の様に曲がつて仕舞ひます、それを避ける爲めです、云ひ換へますと夏は總ての物はゴムの様に伸びるものであります、

「先生、先生」

と、一人が突然僕を呼んだ。

「何んですか」

「先生は僞付ではありませんね」

「そうですとも！先生は棒の様に真直な心を持つてゐます」

「先生、そんなら奈良の大佛さんだつて伸びるんですか」

「そうですとも！」

「何故ひびが入らないんですか」

「そりや入らないよ、全體が一樣に伸びるからさ、解りましたか、目玉も大きくなれば鼻も高くなるんだよ、但しチャンと御寺の中へ入れてあるから直接レールの様に日光に照り付けられないから、伸びたつて殆んど眼に見えないよ」

「ちや日光に照り付けられる所だと、その徴がレールの様にアリアリと解るんですか先生」

「いかさま左様です」